とある異聞と銃器製造(ガンメイカー)

電改突破

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある異聞と銃器製造（ガンメイカー）

【Ｎコード】
Ｎ１９９９Ｕ

【作者名】
電改突破

【あらすじ】
ＰＳＹＲＥＮ－千夜煌貴－の千夜煌貴と天堕雷峰がＳＩＲＥＮの世界へトリップしてしまい、その途中で天堕雷峰は命を落としてしまう。更に牧…宮田から奪った爆弾を使い、自らも命をたった。はずなのに、またしても転生を行う。行き先は「とある魔術の禁書目録」の世界。
異聞と禁書が交差する時、物語は始まる。
注意！　これは作者が「考えるな、感じろ」の精神で書いているため、文章になっていないところも多々あるかもしれません。そうい

うのが嫌な方は直ちに戻るボタンを押しちゃって下さいな。
更に、唯の自己満足ですので、寛大な心で見守ってやって下さい。
７／１８追記　注意書き追加、及び小説タイトル変更、第一話前書き変更
１０／６追記　注意書き追加

シリアスを目指そうとした結果がこれだよ！（前書き）

あらすじにも書きましたが、他にも設定変更やら色々としてしまってるようなので、この小説での注意点をもう一度書きます。

・作者の「考えるな、感じろ」精神でやってるので、文章になっていない箇所があります。

・色々本家の設定を弄ったりします。

・話の方向性が見えません。

・描写が下手すぎます。

それでもいいですか？

よくないならば直ちにこれを読む事を中断して、ニコニコ動画へ飛ぶことをオススメします。

それでもいいよ！って人はどうぞクソ小説ですが読んでいって下さい。

では本編入りまーす。

シリアスを目指そうとした結果がこれだよ！

千夜煌貴　第３日目　１２：３９：４５

千夜「終わらせてやるよ、全部」

『ｇｙａｏｏｏｏｏｏ！』

千夜「じゃあな」

『？、あぁぁあ』

解放を求め、炎へ突き進んでいく者達。

これでいいのだろうか。

千夜「……孤独と言うのもいいか」

一人の男を思い出した。

天堕　雷峰。

千夜「俺は、どうしたらいいんだ？教えてくれよ…雷峰」

意を決し、炎へ向かう。

千夜「俺の命と引き換えだ」

謎の物体を懐から取り出し、炎の中へ投げ入れる。

そこで彼の意識は途絶えた。

シリアスを目指そうとした結果がこれだよ！（後書き）

ＳＩＲＥＮ本家の時間軸とは違います。千夜くんクオリティ流石。
一応、ＳＤＫ＝千夜君なので焔薙（木る伝解放）、改造銃を持っての転生。
この小説は銃がメイン武器になりそうで怖い…。それではまた次回会いましょう。
（感想、意見、評価を戴けると嬉しいです。）

やってきました黄泉のくｎ…あれ？（前書き）

書ける時は１日１話ペースでいきます。

やってきました黄泉のくn…あれ？

川が流れている…

となるとここは三途の川って所か。

ん？誰かくるぞ？

？「ほら、さっさと金出しな」

ああ、そういえば三途の川を渡るには６文銭がいるんだっけ。

千夜「えーと…」

？「早くしてくれよ、私もそんなに暇じゃないんだ」

んー６文銭どころか財布すら無いとは…

探す事１０分程、財布はなんかその辺に落ちてた。

そして俺は少女に尋ねた。

千夜「現代の金で払いたいんだが幾らだ？」

？「６万円」

嘘…だろ？
そんなに金持ってねえぞ。

？「ハハハッ、冗談冗談」
よ、よかった…

？「本当は６００円だ」
千夜「はい」
６００円を手渡す。

？「じゃあ、行きますかー」
そういえばこいつなんか見た事あるな…
まあ、いいか。
眠くなってきたし、寝かせて貰おう。

やってきました黄泉のくｎ…あれ？（後書き）

話が急展開すぎるのは承知の上で読んで下さい。↑遅いか次回はすぐ書けるかもしれません。

ロリ巨乳ってどうよ？やっぱロリはロリ体形のままが一番だろ（前書き）

サブタイトルは気にしてはいけません。

ロリ巨乳ってどうよ？やっぱロリはロリ体形のままが一番だろ

？「そろそろ起きて下さいー」

ん…もう着いたのか、早いな

そう思いつつも船から降りた。

？「ではこのまま直進して下さい。あ、絶対に後ろは振り向かないで下さいね」

千夜「わかったよ」

俺は言われたとおりに直進して行く。

だが

千夜「なにか　建造物が　あるようだ。」

千夜「千夜煌貴　は　どうする？

コマンド？

入る

壊す

破壊する

誰か居ないか確認する

約束を破って後ろを向く↑

千夜煌貴　は　勇気を　振り絞って　後ろを　向いた！

そこにあったのは…

同じ建造物。

千夜「入れって事ですね、わかります。」

取り合えず入らなければ何も始まりそうにないので、謎の建造物に入ってみる事にする。

ロリ巨乳ってどうよ？やっぱロリはロリ体形のままが一番だろ（後書き）

これからの展開が楽しみですね。
ではここで一句
『また次回　お合いしましょう　後書きで』
愚かなる民でございました。

貴方には関係ありません（前書き）

サブタイトルを気にしないで下さい…どうか気にしないで下さい。
大事な事なので2回言いました。

貴方には関係ありません

千夜煌貴が謎の建造物の中に入って数分後

？「お、新人じゃないか、初仕事はちゃんとできたか？」

？「は、はいっ！ちゃんとあそこの前に運びました！」

？「え？確か第一法廷じゃなくて彼奴を連れて行くのは第二法廷のはず…」

？「あ、間違えちゃった。てへぺろ？」

？「そんなもんで許されるかぁー！さっさと連れ戻してきな！」

？「は、はい！只今！」

？「まったく、今回の新人はこの先不安だねぇ…」

？「…でですね……」

？「…ど！……の……は…」

不意にどこかから話し声が聞こえてきた。

千夜「おぉ、ついに第一村（？）人発見か！？」

そのまま進んで行くと、ドアがあった。
どうやら話し声はここから聞こえてきてるようだ。
千夜「ヒャッハー！汚物は消ど…く」
ドアを蹴破り中に入るとそこには…
？「どうしてここに煌貴が居るのですか？」
２人の美少女が居ましたとさ。
千夜「えーき様じゃないか！と言う事はここは幻想郷か！久しいのぅ久しいのぅ」
すると映姫と話していたらしい少女が声をかけてくる。
？「えーと、どちら様でせうか？」
む、上条語を使いこなすとは、此奴、中々の手だれ！
一筋縄ではいかなそうだな…
色々と思考を張り巡らせる。
すると
少女は俺に尋ねてきた。
？「いきなり険しい顔してどうしたんですか？」
俺はわかっている、これは罠だ！心配するフリをして俺を騙そうとしているのか…だが、俺はそんなみえみえの罠にはひっかからんぞ！
映姫「これは天然の厨ニ病ですので御安心下さい」
？「そうなんですか」
いや、安心するなよ！
千夜「ふっ、貴様、中々やるようだのぅ」
？「えーと、貴方の名m…
何か聞きたそうにしているが無視だ！
千夜「さあ、私と決闘（デュエル）しなさい！」

？「え、あの、だから名前を…」

千夜「デュエルスタンバイ！」

映姫「もうどうにでもなれ…」

貴方には関係ありません（後書き）

もう、やってしまった感が否めない…
取り合えず今日は禁書目録をようやく全巻買い揃えましたよ。
新訳のみ無かったんですけどｗ
それと、リア友も禁書の二次創作を書いているそうなので、負けられません。
取り合えず次々回はキャラ設定になると思います。
ではまた次回、Ｈａｖｅ　ａ　ｎｉｃｅ　ｄａｙ.（意見、評価、感想等戴けると嬉しいです）

まさか一時間の苦労が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ（前書き

サブタイトルの事は本当です。
では本編始まります。

まさか一時間の苦労が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ

映姫「ですから、貴方は…」

説教長えー！上条さんを超える説教屋がいたとはな。

映姫「聞いているのですか？」
それを聞くのは野暮ってもんだぜ。
千夜「まったく頭に入ってこないぜ綺羅星☆（くゝω・）」
見事な受け答えだろう？流石俺だ。

？「…クスッ」
こいつ、笑いやがった…だと！？

千夜「絶対に許さんぞ！俺をコケにしやがって！じわじわとなぶり殺しにしてくれるわ！」
どこかでこんな台詞あったよね。
映姫「何ソレ怖い」
イヤコワクナーイ

取り合えずあの少女に近ずく。
千夜「さあ、抵抗しなければ直ぐに楽になるぜ」
？「え？私達まだ出会って間もないのに…そんな事……」
顔を赤らめているが、それより処刑だ、断罪だ！
映姫「煌貴はそういうのには疎いんですよね」

千夜「ところでここは一体どこなんだ？」
俺は彼女に制裁を加えて一息ついてから映姫に尋ねる。
映姫「……ググレカス（ボソッ）」

映姫もそんな言葉知ってたのか。
千夜「まあいい、それよりも此処って天界に繋がってるか？」

映姫「ええ、一応ですが…ってどうするんですか？そんな事聞いて」
ならばいい。
俺の能力『幽閉されし姫君』の能力を使えば天界など直ぐに行ける
からな。

そうだ、彼奴も連れて行くか。
そして俺は部屋の端で昇天していた少女に声をかける。
千夜「えーと、まずお前の名前を教えてくれ」
？「…（ポー）」
ダメだ、使い物にならんな。
仕方無い、武力行使だ。
千夜「我が腕に宿りし獄炎よ！その形状を剣とし、光を断罪せよ！」
そして軽く殴る
？「（ポー）……ハッ！」

よし、これでかの有名な「おれは　しょうきに　もどった！」の状態だな、まあアレは言った直ぐ後にまた洗脳されるんだが。
取り合えず本来の目的を遂行するか。
千夜「えーと、お前の名前を教えてくれ」
？「わ、私は双月、双月・L・アリサよ」

なんか緋〇の〇〇アの某Sランク武偵みたいな名前だな。
千夜「よし、ならばアリサ、俺と一緒に行くか？いやもう来い」
命令系になってしまったが問題ないだろう。

アリサ「どこに行くの？」
千夜「天界だ」
映姫「…（すやすや）」
仕事の疲れでもあったのだろうか、寝ちゃってるよ。
書き置きだけでも残して行くか。

よし、書けた！
アリサ「そういえばどうやって天界まで行くの？」
千夜「簡単な事さ、こうやっていくんだよ」
俺は元の能力『妄想を具現化する程度の能力』を使い、スキマを開く。
（ただこれの欠点は一度使うと一時的に能力が無くなるんだよな、

勿論程度の～って方が）
アリサが俺に聞いてくる。
アリサ「こんな所通れるの？」
千夜「ただし、気をつけろよ、ここには胡散妖怪が住んでいて気が触れるとボッシュートンされるんだ」
アリサ「本当に大丈夫なの？」
千夜「多分大丈夫だ」
それじゃあ、行くか。
アリサ「ちょっと待って！そういえば貴方の名前を聞いてなかったのだけど…」
あ、忘れてたぜ！
千夜「我が名は暗黒の王セシルだ！」
適当に言ってみる。
アリサ「そう、よろしくね、セシルさん」
いやいや、どうして納得する！？
千夜「あ、いや、違うんだ」
アリサ「何が？」
あー、じれったい。
千夜「俺の本当の名前は千夜煌貴って言うんだ」
アリサ「本当に？」
アリサが上目遣いで聞いてくる。ちくせう、萌えたじゃねえか。
千夜「大丈夫だ、問題ない」
アリサ「ならいいんだけど、さあ、早く行こ？」
それじゃあ行くか。いざ、天界へ！

まさか一時間の苦労が回線問題で水の泡になるとは思いもしなかったわ（後書き

今回は一度全部強制的に書き直せざるを得なかったのでかなり時間がかかりましたｗｗ
取り合えずオリヒロイン登場。
能力は次回のキャラ設定で明かされますので、楽しみに待っていて下さい！
それでは次回、また会いましょう！（感想、意見、評価等お待ちしております。）

キャラ設定（前書き）

くっ…飯を食ってから書こうと思っていたが、寝てしまったｚｅ☆まあ、悔んでも仕方ないんで、本編――じゃなくて設定いきましょう！８／４追記アリサの容姿とか追加８／５追記色々と微調整１２／２９千夜煌貴の設定を変更

キャラ設定

オリキャラ設定

千夜煌貴

性別　男（女）

歳　１６

髪色　透き通るような銀

瞳の色　紅。別に月の狂気に囚われたわけではない。

能力名『幽閉されし姫君』、『妄想を具現化する程度の能力』、『領域支配（アブソリュートフィールド）』

『幽閉されし姫君』

説明

主に空間支配と考えて貰えればいいです。

一方通行にも勝る絶対隔離空間を自分に纏わせる事も可能。

残りは随時追加予定

『妄想を具現化する程度の能力』

説明

名前の通りです。

幽閉されし姫君の効力で、使用回数に制限がある。

『領域支配（アブソリュートフィールド）』

説明

自身の定めた領域のものをどうにでもできる。ただ、同時に何かをする事はできない（例えば風を生み出しつつ自分をテレポートさせる等）。自分の身体に傷がつく行為は全て自動で防ぐ（この時のみ例外で、防ぎつつ他の場所にテレポート等もできる）ようになっている。制限として領域支配を解いて３分後に脳に強い衝撃（まるで鈍器で殴られたような痛みとは本人の感想である）がくる。かなり

痛いので、それから寝るまで能力の行使が一切できない。今思うとガンダムＯＯ見ながら考えたのが間違いだったと思う。
使用武器
神刀　焔薙
説明
例の神殺し武器。
こいつは魔力、神力、妖力を創る事が出来る。
→創られる量は少なく、外へ出やすいが幽閉されし姫君で、外へ出ないようにする事で蓄えておく事が出来る。
→量こそ少ないが、濃縮されて創られるために、実際かなりの量が創れる。
木る伝解放時、蓄えてある力も解放する事で身体能力がかなり強化される。
→ウィリアム（全開時）と対等（又はそれ以上）に渡り会える。
壊神刀焔薙
通常駆動ではどんな刀にも変化できる。
超過駆動になると…？
ホライゾン見ながら考えたのがｒｙ
狙撃銃
説明
なんの変哲もない狙撃銃。
スナイパーライフルではなく、狙撃銃。
宇理炎
説明
神の武器。
元は神の炎（ウリエル）から。
主人公により、術式を組み換えられ命と引き換えでなくても神の焔が出せるようになった。
ちなみに剣と盾、２セット持っている。
備考

剣術を得意としている。
→焔薙（能力解放）と組み合わせれば殆どの敵に勝てるが、体に負荷がかかりすぎるために、一度解放を解くと、続けて１時間は使えない。
→剣術においては、彼の祖父が抜刀術の師範代だったため、小さい頃から修行してきた。そのため、抜刀術を使えば、殆どの者は倒せる程度の実力。
また、ナイフの扱いにも長けており、投げナイフ一本で山にいた熊を全滅させた事もある。
恋愛には疎い。

双月・Ｌ・アリサ
性別　女
歳　１６
髪色　青
瞳の色　黒
身長１５０ｃｍ
髪型セミロング
顔立ちロリ顔

Ｂ７６　Ｗ５６　Ｈ８１
能力　銃火機を製造し、扱う程度の能力

千夜「私の装備が一体一又は多対一の戦闘用じゃないかと思うんだけど」
電改「よくあるこった、気にすんな」
千夜「こんな作者で大丈夫かな？」
電改「大丈夫だ。問題無い」
千夜「…というかアリサの設定が適当すぎない？」
電改「出番無いしな。出番があればあるほど設定も増えていくものだ」
千夜「もうやだこの作者」
電改「へっへっへ…俺がいなかったらお前は生み出されてなかったがな！」
千夜「…呆れて何も言えないわ」

いまじゃパワーをメテオに！（前書き）

もうサブタイトルが思いつかない…
では本編どうぞ。

いまじゃパワーをメテオに！

アリサ「それで、天界へ言ってどうするの？」
唐突に聞いてくる。
千夜「まあ、お前もこのまま次の命が貰えるのを待つのは嫌だろ？」
そう。
千夜「神を殺す」
アリサ「え？」
驚きを隠せないのも無理はない。
千夜「いける。この焔薙があれば――神を殺せる」
そう、断言してスキマから抜ける。
千夜「！？誰か来る！」
すぐさま近くの建物の影に隠れる。
？「あーあ、やっぱり見回りは暇だなー、絶対戦闘班の方がいい気がするんだけど…まあ、そんな事言っても無駄か」
こいつは使えるな。
千夜「なあ」
取り合えず声をかける。
？「ん？なんだお前」
千夜「用件だけ言う、神殺しに協力してくれ」
？「なに！？神殺しだと！」
あ、やっぱマズったか？と思うが
？「是非とも協力させてくれ！」
以外と簡単だったな。
千夜「ありがたい、所で貴殿の名はなんと申す」
？「災灯　魔凛と言う」
千夜「色々突っ込みたい部分はあるが、作戦内容を説明する」
そして、ずっと建物の影にいたアリサを呼ぶ。
千夜「よし、じゃあ話すぜ」

作戦内容はとってもシンプルなものだった。
?:魔凛が神の元へ行く
?:俺が狙撃銃で神を撃つ
?:わざと外して、神を魔凛が誘導する
?:そのポイントは予め設定してあるため、そのポイントで待つ
?:神がやってきたら、焔薙で首を切り、殺す
終了。
千夜「では、作戦決行だ！」

いまじゃパワーをメテオに！（後書き）

はい、今回でアリサの能力を出そうと思ったのですが、次回へ回します。
そして今回も新キャラ追加！
後でキャラ設定に付け加えておきます。
ではまた次回お会いしましょう。
（感想、意見、評価、誤字脱字、矛盾点等お待ちしております！）

神殺し→神になる（前書き）

はい、今回はまともなサブタイトルです。
後、アリサの能力はキャラ設定に書き加えておきますので、そちらを見て下さい。

神殺し→神になる

千夜「さあ、楽しいｓｈｏｗの始まりだ！」
そういいながら、目的のポイントまで移動する。

アリサ「でもこの距離から狙える狙撃銃なんてあるの？」
千夜「うーん、こいつは倍率が変えられないタイプの狙撃銃だから、確かにやりにくいな」
しばし考える。

千夜「じゃあ、手榴弾でも投げるか」
アリサ「それだと魔凛まで巻き添えになるわ」
千夜「不発弾ならいいんじゃないか？あいつなら不発でも上手く神を誘導出来ると思う」
そして、ポイントにつく
アリサ「だったら、早くしましょう」
千夜「ああ」

コンコン
魔凛「失礼します」
？「何の用だ」
魔凛「いえ、それよりもお耳に入れて貰いたい事が」
？「……なに！？我（オレ）の命を狙う輩がいるだと！」
魔凛「ですので、お早めに避難をば」

？「だが、その確証はないのだろう？」
魔凛「ですが――
その時、突如部屋の中に閃光が走った。
？「閃光弾だと！？」
魔凛「こちらです！早く！」
そして目的のポイントへ誘導していく。

千夜「間違えて閃光弾投げちまったが、どうやら成功のようだな」
アリサ「後は例のポイントまで行くだけね」
それにたいし千夜は
千夜「そうだな、だがその前にやる事がある」
アリサ「なに？」
いきなりアリサの胸をナイフで刺した。
アリサ「な、にを…」
千夜「ふん、上手く化けたつもりだろうが、俺にはわかるぜ」
更にナイフを奥へ刺しながら千夜は言った。
千夜「なあ、神様よォ」
神（？）「ククク――やはりこの程度の変装では貴様は欺けんか」
そういうと神は服をナイフごと脱いだ。
千夜「さあ、アリサを返して貰おうか」
焔薙を構えつつ、神へ近ずく。
神「あいつは我（オレ）の嫁ｎ
千夜「このロリコンがァァァァァァ！」

千夜は出せるだけの力を拳に込めて、鉄拳を繰り出す。
神「そげぶ！」
ハァハァと息を荒げながら、神へ問う
千夜「アリサをどこへやった…」
その声には怒りが込められていた。
神「あいつは学園都市に送り込んでやった！へへ、貴様如きに渡す位ならば、転生でもなんでもさせてや――グハァ！」
今回ばかりは許せない。
神がこんな傲慢でよいのだろうか。
千夜「ハハ、ハハハハハハハハハ！」
狂ったように笑う。
千夜「貴様には出来ない？だったら俺がテメェを殺して新世界の神になって、アリサを探しに行ってやるよ！」
そうして、神の体に焔薙を刺し、神力を吸い取る。
神「く、我（オレ）の力が、抜けていく――」
千夜「……待ってろよ、アリサ」
神の力を全て吸い取り終わると、こう宣言する。
千夜「皆の者、よく聞け！私がムス…新たなる神だ！」
天使「え？って事は…」
千夜「そうだ、あんな傲慢な神の元で働かなくともいいのだ！」
天使達『よっしゃー！新たなる神様バンザーイ！』
千夜「新たなる神の名は、ディゼルタ＝クロウだ！」
天使達『クロウ様バンザーイ！』
千夜「では、まずは城がいるな」
魔凛が近ずいてくる。
千夜「どうした、魔凛」
魔凛「いや、城はもうあるんだが」
千夜「ふむ、だがしかし！前の神の時代を終わらせ、新たなる時代へ進む為には新しい城が必要なのだ！」
天使達『では、早速取りかからせて戴きます！』

千夜「だが、決して無理はするな、お前らが過労死したら、元も子もないからな、休む時はきっちりと休めよ！」
千夜「――――新たなる時代の幕開けじゃあ！」

神殺し↓神になる（後書き）

うわああ！やってしまった…

ｏｒｚ

今回もギャグ回の予定だったのに、シリアスになってしまったァ！

まあ、次回はギャグ回です、きっと。

ではこの辺でキーボードを打つ手を止めさせて戴きます。

（感想、意見、評価等、随時お待ちしております！）

１０００年後の世界（前書き）

ちょっと時間が出来たので更新。
たまには一日二回更新もありだと思うよ。

１０００年後の世界

クロウ「…かなり発展したな」
魔凛「まあ、これもお前の隠されたカリスマ性のおかげだな」
そうは言っているが
クロウ「だが、これも我(オレ)の計画の一部にすぎんのだ」
そういうと、ディゼルタ＝クロウは宣言する。
クロウ「お前ら、よく聞け！我(オレ)は今から学園都市へ乗り込む」
天使達にどよめきが走る
クロウ「安心しろ、俺の代わりはいる」
そう言って魔凛を指差し
クロウ「これからは魔凛が指示を出せ」
魔凛「え？」
魔凛は状況が飲み込めていないようだ
クロウ「まあ、具体的には俺が学園都市からここへ指示を出す。それを魔凛が受け取り、お前らに同じ指示を出す。それだけだ」
そして
クロウ「そういえばまだここの名前を決めてなかったな」
うーむ、と顎に手をあてて考える。
クロウ「よし、ではここの名前は【バロン帝国】だ！」

そう言い残し、クロウは去って行った。

魔凛「行ったか」

天使Ａ「どうするんだ？」

魔凛「まあ、次の指示を待つしかないだろう」

そういうと魔凛達は、自分の持ち場に戻って行く。

クロウ「…」

クロウはまだ迷っていた。

天界での時間は地上での時間の１／１００００な為、地上ではまだ一ヶ月しかたっていない。

クロウ「行くか」

クロウは決心を固め、学園都市へ行く為の旅の扉へ入る

？「まちな！」

そういわれ、クロウは旅の扉へ進む足を止める

クロウ「誰だ？」

そこには、謎の2人組がいた。
？「俺はセリア」
？「私はスリア」

『なんだ、コイツらは』
セリア「まあ、待ってくれよ」
スリア「少し話があるの」

ふぅん、と言い焔薙に手をかける。
セリア「ま、待て！落ち着け！よし、簡潔に述べるとだな」
スリア「アリサとやらは学園都市にて何かがあったみたいなの」

キッパリと言われ、少し戸惑う

クロウ「何があったんだ！」
セリア「い、いや、詳しい事は知らない」
スリア「自分で行って確かめる事ね」
そして、クロウは再び歩みを進める。
一人の少女へ会う為に。

１０００年後の世界（後書き）

ナンテコッタイ／（＾０＾）＼
ギャグが全然出ない…
学園都市で安定したら、いけそうな気がします。
ではこの辺でお別れとさせて戴きます。
コメントをいただけるとテンションが上がります。

学校探して三千里歩くなんて事はない（前書き）

ようやくディゼルタ＝クロウから千夜煌貴に戻ります。
戦闘の時はクロウ、普段は千夜ですので、バトル以外はかなりネタが混ぜられると思います。
そして、バトル描写が相変わらず終わってますが、本編をどうぞ！

学校探して三千里歩くなんて事はない

学園都市へ降り立ったクロウだったが
クロウ「くッ…やはりこの姿を保つのは無理――か」
仕方無く千夜煌貴（千年前）の姿に戻る。
千夜「取り合えず学園都市ってくらいだし、学校へ入らなくては！」
取り合えず千夜は受け入れてくれそうな学校を見つけに、学園都市を歩き回る事にした。

暫く歩くと学校らしき建物が見えてきた。
千夜「お、まずはここに行くか」
彼はまだ知らなかった。
ここがかの有名な長点上機学園であると…

千夜が入り口を探していると、教員らしき者がいた。
すかさず声をかけｒ
だがそこで彼は考えた
（そういえばここってどの位のクラスの学校なんだ？）
そう、彼は学園都市へやってきて数時間程なのだ。
身体検査（システムスキャン）もしていない。

もしもここが名門校ならば門前払いをくらうのは目に見えていた。
千夜「学園長でも探すか」
ここの一番上(トップ)に話をすれば活路はあるはずだ。
（大体学園長的な人は、良い人だからな。話くらい聞いてくれるだろう）

更に歩き回り（教員、生徒に見つからぬように）学園長室らしき部屋へ入る
コンコン
？「誰だ」

お、爺さん声！これは良い人フラグバリバリに立ってるぜ！
千夜「すみません、私はこの学園へ入学したくやってまいりましたが、実は大体の能力はわかっていても、自分の能力のレベルがわからない次第でございまして…」
？「ふむ、あいわかった。丁度明日、我が校では身体検査(システムスキャン)がある。だから、まずは仮入学、という形でよろしいかな？」
こ、この人は…無茶苦茶良い人じゃねえか！
千夜「はい！ありがとうございます」
？「なんのなんの、儂は有能かどうかは自分の目で判断したいからのぅ。おぉ、そういえば貴殿の名はなんと申すか」
千夜「ディゼルタ…じゃなくて千夜煌貴と申します」

？「千夜煌貴か、儂は浜瀬　双磁と言う者だ」
名前がかっけえな…
普通に読むとはませそうじとどこにでもいそうな苗字と名前なのにな。

浜瀬「では、明朝０８：３０にここへ来るように」
千夜「その前に、一つだけよろしいでしょうか」

俺はずっと心配だった事を告げる。
そう、俺はさっき学園都市へ来たのだ。
どういう事かわかっただろう？

千夜「私の住む所はどうすればよろしいので？」
浜瀬「そうか、ならば…おぉい！貴文君！」
大声で誰かを呼ぶ。

貴文「なんでしょうか、学園長」
出て来たのは思い切りゴツイ体付きの人物だ。
貴文とか呼ばれてたな、多分教師の中でも
『生徒指導』なる階級に鎮座していることだろう。
浜瀬「それがだね、ここにいる子は
貴文「はいはい、住居へ連れていけでしょう。これで何回目だとおもってるんですか？」
浜瀬「まあ、少し老いぼれの我侭を聞いてくれんかのぅ」
貴文「もうその台詞は何回も聞きました、ハァ…わかりました。では、コイツは預かっていきますからね」
え、ちょ！コイツ軽々と俺を持ち上げやがった！

貴文「では、失礼します」

そして人気（ひとけ）の無い所へ行くと、俺の足がようやく地面についた。
貴文「学園長の命令だから仕方無くではあるが、貴様に住居を与えてやる」
千夜「はぁ、ありがとうございます」
取り合えずこれで住居（仮）は確保だな。

いきなり貴文さんはメモを俺に渡してきた。
貴文「そのメモに書いてある所へ行け、そこに俺のダチの黄泉川ってやつがいる。そいつに「長点上機から来た」と言えば全てを察してくれる、はずだ」
黄泉川ねえ、じゃんじゃん行ってる体育教師を探せばなんとかなるな。
去り際に貴文ｓが
「まぁ、部屋が空いてるかは別だが」
と呟いた。それこそツイッターでツイートする位自然に。

千夜「（うっし！原作キャラとようやく出会えるぜ！）」
そんな期待に胸を膨らませていると
ふと、こんな会話が聞こえてきた。

「ねえ、知ってる？今日、久々に第一位が登校してきたんだって！」
「え！粉バナナ！」
「ですのネタは古いから止めた方がいいよ」
「じゃあ、嘘だ！」
「ひぐらしもかなり昔だと思うけど」

俺と友達になって欲しいヤツが一人いるし。
千夜「（一方通行ねぇ、まあ、俺には関係ないがな）」
だが、次の廊下を曲がった瞬間

？「―ッ！」
千夜「うおっと、危ない」
誰かとぶつかりそうになった。

千夜「すまなかったと思っている。後悔はしていない」
？「ンだテメェ」

こ、この特徴的な喋り方！
千夜「まさか、一方通行（アクセラレータ）！？」
？「御名答。」
あ、ノッてくれた。
と思ったが
千夜「何すんだ！普通の能力者なら即死レベルの攻撃だぞ！」
一方通行「だったら、テメェは何で今、生きてるンだ？」
！やべぇ、俺の能力の一部に勘ずいたか！？

一方通行「まァ、いいか、だが次は無いと思いな」
千夜「よく言えたな、後悔するなよ？」
一方通行「テメェも学園都市最強の能力者を目の前にしてよくそんな事言えたなァ」
あぁ、死んだな。

千夜「クソが！空間固定（エアロック）！」
一方通行にはきかないが、少しなら時間が稼げる。
これなら行け…
一方通行「残念だったが、俺に出会ったら、そこから先は一方通行だ」
すぐさま一方通行が脚力のベクトルを操作し、俺を追いかけてくる。
千夜「そうだ！」

一方通行「どこまで逃げても一緒だぜェ？」
俺は宇理炎を握り締める。

千夜「これならどうだ！」
宇理炎を振るい、神の炎で一方通行を焼く。
一方通行「こンなチャチなもんで俺から逃げれるとでも思っ…がぁぁ！」
成功だ。
一方通行は確か魔術は上手く反射出来ないはずだ。
ならば、神の炎を使えば問題ない。

千夜「テメェが俺に勝てない理由は１つ、たった単純（シンプル）な答えだ」
さあ、おきまりのあの台詞だ！
千夜「テメェは俺を怒らせた」
そう言い残し、千夜は学園を後にする。

一方通行「クソが…俺が、勝てないだと？」
そう、一方通行は、最強であった。
だが、無敵ではない。
どんな敵にでも勝てるなんていう事はない。
それはさっきのやつも同じだ。
なのに何故？
一方通行「面白ェ、暫くこの学園に来てやろうじゃねェか」
一方通行は決めた。
ヤツをも越し、今度こそ、本当の最強になると。

学校探して三千里歩くなんて事はない（後書き）

いやあ、長いなあ！ｗｗ
書き上げるのに久々一時間以上かかりましたよ。
それと、一方通行とバトルしてるのに何故クロウにならないか、お答えしましょう。
これは千夜君が、バトルではなく、逃げるために、能力を使ったからです。
それだけなのですよ、みー☆
では、この辺で後書きを終わらせて戴きます。
感想貰えると続ける気が増えます！

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの（前書き）

眠くて全然書けない…まあ、頑張りました。
では、本編どうぞ

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの

見事一方通行を振り切り

貴文ｓから渡されたメモ通りに学園都市を歩く千夜。

だが、そこでまっていたのは、悪夢だった

千夜「ここか」

簡易キンクリしてきたためそんなに疲れてはいないが、先程の一方通行戦で使ってしまった体力は完全には回復していないため、早く休みたいのだ。

取り合えず中に入ってみるか。

千夜「こちらズネーク。今から潜入捜査を開始する」

？「危険だ、ズネーク！単独行動はよすんだ！」

千夜「分かってるぜ、大佐ぁ！」

千夜「絶対に成功させてみせる。俺を信じろって！」

千夜「じゃあな！大佐！」

？「ズネーク？ズネーーーク！！！」

？「えーと、どちらさまで？」

千夜「早速気づかれちまったか、だが俺のＦｏｒｃｅは止まらないぜ！」

？「いや、何言ってるのかさっぱり…」

あ、そうだ！こいつもここの生徒なら黄泉川教諭の現在地も知ってるかも

千夜「意味不明なこと言って悪かった。だが、これだけは聞かせてくれ。黄泉川教諭は今現在どこにいる？」
？「えーと、確か黄泉川先生ならあっちの方で見た…ってもう行っちゃったか」
よし、早い所宿確保だ！

しかし彼はまたまたまだ気付いていなかった。
今出会った人物こそが
上条さんであると…

予告と違ってもいいじゃない。だって人間だもの（後書き）

終わり方まで酷いとは。
まあ、眠いし、仕方無いと思っている。
ではまた次回〜（感想を下さると作者が調子に乗って投稿ペースが早まります）

住まい探しのすゝめ（前書き）

あー、なんかサブタイトルがＩＳネタに走ってきているな…
そんなぼやきはさておき、本編どうぞ！

住まい探しのすゝめ

千夜「いきなりで悪いがお前が黄泉川教諭だな？」

？「流石にいきなりすぎて状況がよく理解出来ないじゃんよ…」

そういえば貴文ｓから授かった文書があったな。

千夜「ならばコレを見よ！全ての事情が分かる（らしい）優れたものなのだッッ！」

そういいつつ、黄泉川教諭に貴文ｓより授かった文書を渡す。

？「あー、またか…アイツも苦労するじゃんよ……」

やはり一枚のメモだけで事情が分かったか…怖るべし、貴文ｓ

黄泉川「事情はわかったじゃんよ、後は黄泉川お姉さんに任せなさい！」

おお、頼もしいことこの上ない…

黄泉川「じゃあ、部屋が用意出来たら連絡するから、それまで、学園都市を適当に見学してるじゃんよ」

千夜「あ、じゃあ、これが俺のアドレスなんで」

アドレスを教えて、直ぐに校舎を後にする。

…にしても「また」って事は前例があるって事だよな…まあ、いいが。

千夜（にしても腹減ったな）

確か長点上機からここへ来るまでにコンビニがあったはずだから、そこでなにか買うとするか。

……出来るだけ一方通行に会わないように。

千夜「ゼェ…走ってきたのは…流石に…ゼェ……辛かった…」
無理に全力疾走してしまった為、もう自立二足歩行が出来ない程疲れてしまっている。
実はここに来るまでにファミレスもあったのだが、手持ちの金を考えても、コンビニの方がいいのだ。

店員「いらっしゃいませー」
相変わらず無愛想だな、と思いながらまずは飲み物コーナーへ向かった。
昔、コンビニは儲ける為に飲み物コーナーを店の奥に設置してるという話をテレビで見たが、今はそんな所に設置すんなよ！って気分だ。

千夜「ま、まずはスポーツドリンクを一本、それからコーヒーでも大量に買ってやるか、２つの意味があるけど」
１つ目はただ単純に飲みたいってだけ。
２つ目は一方通行に対するちょっとした反抗だ。

そして、他にもパンを数個籠にいれ、レジへ向かう。
店員「以上でよろしいで…ヒッ」
千夜「あ、ヤベ」

そう思った瞬間、体はもう動いていた。
金をだし、レシートはいらないと言って、買ったものを奪うように手に取り、出入り口へ走りだした。
何故この時走れたのか、それは彼自身もわからないという…

一方通行「ンだァ？今の高速で走っていったヤツはよォ」
だが、一方通行は特に気にせずに、飲み物コーナーへ向かう。
だが、そこにあるはずのコーヒーは、千夜に買い占められてしまったため、全て無かった。
一方通行「まさか、さっきの野郎、今日長点上機で会ったヤツじゃねェか？」
まあ、と一方通行は軽く息を吐き、別のコンビニへと向かう。
一方通行（長点上機の生徒にあンな野郎は居なかった。ならばアイツは絶対に明日の身体検査にはくる。だったら、ヤツの実力が見れるチャンスでもあるわけだ、まァ、楽しみにしといてやらァ）

住まい探しのすゝめ（後書き）

ふう、宿題終わんねｗ
明日は一日中頑張るので、更新は無いかと…
感想は貰えたら今回みたいにリアルを犠牲にしても書きますｗｗ
では、また次回お会いしましょう。
９／１４サブタイトル変更

色々ありまして。（前書き）

どうも、電改です。
相変わらず眠気が半端ないですが、頑張って更新していきます。
では、本編どうぞ。

色々ありまして。

千夜「本当、昨日は色々あった。」

あれから色々とあったのだが、それはまた後日話すとしよう。
それよりも今日は身体検査（システムスキャン）の日だ。

俺は少し緊張気味で、学園長の居る部屋へ入る。
コンコン
千夜「失礼致し候」
あ、昨日見てた幕末志士の喋り方が移っちまった！

学園長「よくぞ　まいった！」
あんたはどこの王様だ。
出来る事なら銅の剣ぐらいよこしてくれ。

貴文ｓ「よし、千夜。こっちについてこい。」
学園長…よくぞまいった！しか言ってねえｗｗ
もっと喋らせてあげようよｗ
貴文ｓ「お前、声に出てるぞ」
あっ、やべ。これは印象悪かったか？
まあ、そんなこんなしてるうちに鉄格子のついた…リアルな牢屋みたいな所に連れてこられた。

千夜「こ、ここは？」
貴文ｓ「見ての通り、お前の能力の検査場だ」
ですよねー
連れてこられる場所が牢屋とか俺、何かしたか？とか思ってたぜ。
貴文ｓ「では、検査内容は後に伝える。」

って事はまさか…な。
貴文ｓ「それまでこの中に入って待ってろ」
千夜「な、なんだってー！」
次回へ続く。

色々ありまして。（後書き）

短い…でもこれが今書ける限界だ、、、
僕はもう疲れたよデスラッシュ…一緒に寝よう（永遠に）
→自重。
ではまた次回〜

身体検査、そして…（前書き）

どうもです。
初期の活気はどこへやら、今では更新ペースがガクっと落ちました。
自由気ままにやっていきますので、応援よろしくですー。

身体検査、そして…

牢屋的な所に入れられて数分後、アナウンスが聞こえてきた。

アナウンス『これより、実験を行います。まずは、お手元の腕輪を装着して下さい』

えーと、腕輪、腕輪っと、あったあった。

アナウンス『装着しましたか？では、汝に幸あれ…』

…

放置かよ！

流石にこれで放置はないぜ？

それにしても、もしかしてこの腕輪…勝負に負けると毒が注入されるとか！？

……ないか。

それよりも早く始まんないかなーっと。

そう、それは突然やってきた。

ガション、という機械音の後、学園長の声が聞こえてきた。

学園長『えー、今回は青龍房を目指してみました。それではルールを説明します。』

ルールは以下の通り。

・能力は腕輪により解析される

・能力とレベルがわかり次第「身体検査」は終了

・→３０分避け切るか、飛んでくる物の中にあるダミーを壊せば部

屋から出られる
・それでも能力不明の場合は…らしい

学園長『では諸君、健闘を祈る！！！』
どこからか叫び声が聞こえてくるあたり、他の生徒もいきなり牢屋に軟禁され、腕輪をつけ、現在にいたるって感じだろう。

スピーカーから声がしなくなった途端、ガションという音がしたわけが理解出来た。
そう、壁一面に穴が開いているのだ。

千夜（ここから鏃とか出てくるんじゃないだろうな…）
予想は的中した。
穴から次々出てくるソレをなんなく避ける。
まだまだスピードも遅いし、弾幕ごっこに比べればどうという事はない。
『…ｓ……２…』
何か聞こえたと思ったら途端に鏃の出てくる速度、その量、双方が急激に増した。

千夜（まだ、見える！）
だが、それでもなお、軽いフットワークで千夜は避け続ける。
『……２０』
千夜「セーフティロック解除！」
癖で言ってしまった。
危ない、と思った瞬間。
自分の半径２、３０Ｍの空間の時間が、止まったように感じた。
それにより、千夜は直ぐにダミーを見つける事が出来た。
千夜（うえきの法則で天界人のレベル上げてるみたいだな…）
アナウンス『千夜煌貴、能力査定、ダミー破壊共に成功。ドアのロ

ックを解除します』
どうやら無事に終われたようだ。
では、これからどうするかな…ん？
千夜の見る場所には1人の少女がいた。
千夜はその少女を知っている。
そうだった、今まで忘れていた。
自分がここに来た本当の理由は、
千夜「アリサ！」

身体検査、そして…（後書き）

さすがに無理矢理すぎたかな？と思っていますが、私的にはこれでいいかと。
ちなみにこれからの流れとしては
日常偏（原作キャラとの絡み有）→原作偏（どのくらいまでいこうかは決めていません）→オリジナルストーリー（まだ内容は考えていません）→原作偏→オリジナルストーリー→原作偏（最終巻まで）を予定しております。では、また次回〜

ネタ回？いいえ、ｋ（ｒｙ（前書き）

オリキャラはまあ、１０人程度集まればいいかなと思っている。
目標【今回こそネタ回にする。頑張る。】

ネタ回？いいえ、ｋ（ｒｙ

アリサ「千夜…？貴方千夜なの？」

やはり当たりだった。

彼女は涙目になりながらこちらへやってくる。

フラグ立ったな。

そう、考えてしまった自分を呪いたくなった。

そうなのだ。彼女の手元をよくみると、そこには

硬ぁく握り締められた３８ｍｍ口径銃が…って危ねえ！発砲してきやがった！

アリサ「なんで早く助けにこなかったの！？ねえ、なんで？」

いえ、こちらにも事情が…いえ、大それた事ではないのです。

ちょっと神様的なことしてただけでありまして、はい。

――と、説明しながらも発砲してくるアリサ。

確かあれは装填数が８発のはずだ。

弾切れになればマガジンをかえる時に、よほどのて手だれでなければ若干のタイムラグがうまれる。そこを俺の真・「幽閉されし姫君」を使い、叩く！

バン、バン、バン。とミリタリー好きの俺には結構好きな心地良い発砲音が聞こえてくる。

今までで、７発。

後１発撃ってくれれば…

アリサ「まさか、マガジンを変えるスキに――とか思ってる？残念。私の能力は「銃器製造（ガンクリエイター）」。説明は…しなくてもわかるよね？」

あるぅぇー？そんなのアリすかー？

アリサ「卑怯もなにもあったもんじゃないわ」

確かに性格変わってらっしゃる。

俺が持ってる武器で反撃出来るもの…仕方無いな、アレを使うか。

千夜「いいだろう。では、俺も少しばかり卑怯な手を使わせてもらう」

簡単だ。アイツの動きが1秒でも制止すればいい。

ならば、俺のとれる最善の策は――ッ！

千夜「極寒の地の氷の神よ、我に力を与えたまえ。歌声は氷柱、氷柱は剣。身を貫きし氷の刃よ、今嵐となり我が障壁を壊さん…。エターナルフォースブリザード！！！」

アリサ「え…。」

その場が氷つく。

ここでエタブリの効果を教えてやろう。

相手は必ず死ぬ。

そう、つまりは

千夜「Ｔｈｅ・ｗｏｒｌｄ！時よ、止まれ…。」

今度は本当に時が止まる。

この時間を利用し、一気にアリサとの距離を詰める。

後３m弱といったところで時が動きだす。
だが、充分すぎる距離だった。

千夜「悪いがアリサ…お仕置きの時間だ」
アリサ「ひッ！また、アレ…？」
俺はその問いにたいして笑いながら。

千夜「罪の深さなんて自分に聞いた方が早いんじゃないか？」

アリサ「…う、ぅうん。ここは？」
四方を見渡す限りでは、白い壁しかないが
一応ベットには寝かされていたようだ。

千夜「眠り姫のお目覚めか…気絶するだけで丸1日も寝るか？普通」
アリサ「ここは？」
千夜「まあ、俺の部屋…ってとこかな」
アリサ「そう…」

よほど負けたのが悔しいのか、アリサはずっと俯いていた。
まあ、仕方無いよな。当然の報いだ。
ってかあれは常人だったら即死だぜ？俺だから避けれたがな、あれは思いっきり命（タマ）とったる！の勢いだったから…つい、こう、カッと

なって…
よし、学校で聞かれたらこう答えよう。
ついムラムラしてやった。反省はしている。

アリサ「でもさ、どうして千夜は彼処にいたの？」
千夜「いや、ちょいと青龍房を体験してただけだ…ほぼ能力無しでな」
アリサは驚きながら俺に向かって虚空から呼び出したハンドガンを発砲してくる――が、なんの躊躇いもなく避け、一瞬でアリサの前に移動し、銃を持っている手を蹴る。

アリサ「アレが避けられるなら私の弾丸なんか避けられて当然か…」
あーあ、更に事態が悪化していくよ。
まあ、ここでいつまでもうなだれていてはしょうがない。
だから、今俺に出来る最善の手は…
千夜「そうだ、学校　行こう。」

ネタ回？いいえ、ｋ（ｒｙ（後書き）

今回は結構ネタ入れたぜ…
そしてハンドガンなんてｗｉｋｉ見るほど知識が皆無だったぜ。
そして今回、ようやくこの二次創作のタイトル「とある異聞と銃器（ガンメ）製造（イカー）」の意味がわかりましたね。つまりは主人公とメインヒロインなわけですよ、はい。
では、次くらいで溜めに溜めてきた主人公の能力が発覚します。
…４文字で考えるの難しかったです。
９／１４サブタイトル変更

能力判明（前書き）

台風６号接近記念です。
では、本編をどうぞ。
８／５サブタイトルを修正

能力判明

それから1時間後、俺は学園長室にきていた。

学園長「さて、千夜君」

どうやら機密保持のためか、俺と学園長の2人しかいないらしい。

学園長「これが、身体検査の結果だ。」

そう言って学園長は懐より茶色の封筒を渡してきた。

この中に結果の書かれた書類があるのだろう。

千夜は、恐る恐る封筒を開け、中身を確認する。

千夜煌貴　力　B　知力　B－　素早さ　B　殺傷能力　B＋…etc

千夜「――ってこれはどこのスタンドの解析結果じゃあー！！」

まだ力とか知力とかは許せるレベルだ。

殺傷能力までくると流石に…という事だ。

学園長「まあまあ、落ち着いて。それよりも、最後の一枚。それが君の最も気になっているものではないか？」

ま、さか…

俺の能力がついにわかるのか……

千夜「これが、最後の一枚…」
いよいよだ。
俺は、この時を待っていたー！！！

学園長「あ、見てるね、でもその書類には詳しい事は書いていないだろうから口答するよ」

千夜煌貴　能力名『領域支配（アブソリュートフィールド）』

学園長「まあ、読んで字の如く。って感じだね」
なんだか学園長の話し方が段々と友達感覚になっていく気が…まあ、いいか。

学園長「で、レベルとしては5相当だね。序列は…6位らしい」
研究しがいのない能力ってことか。
学園長「うん。じゃあ、これで君もはれてこの学園の生徒だ。」

ここで必要なものは後で寮に送って貰えるらしい。
なので俺はこの学園の構造になれるため少し散歩をすることにした。

能力判明（後書き）

短いデスが、ここで終わりです。
では、また次話で会いましょう。

超電磁砲、現る。（前書き）

一度データが紛失したので、書き直しです。
では、本編どうぞ。

超電磁砲、現る。

散歩も終わったので、寮に帰ることにする。

今日は６月１９日。
原作スタートまで後一ヶ月。
原作が始まるまでには自分の能力くらいは使いこなせるようになった方がいいのかもしれない。

千夜「（しかし、原作がまだ始まってないから平和だなー）」

そんな呑気な事を考えていると、背後から誰かに呼ばれたようなきがした。
振り返ってみるとそこにはあらふしぎ、序列第三位様がいらっしゃるではありませんか。

千夜「あー、えーと、俺を尋ねてきたのか？」
御坂「そうよ、だってアンタ、学園都市にきてまだ一週間もたってないんでしょ？」
やっぱり上にはバレていたか。
御坂「凄いわねー、あの第七位を超える原石ってことで、ニュースはもちきりよ？」
千夜「へー、そーなのかー。じゃ、俺は急いでるんで！」
戦闘フラグを感じたので、適当に受け流して逃げる。
御坂「……！」
何か言ってるようだが、無視しよう。

そうして、寮へ帰ってきたわけなのだが。
千夜「なんかボスクラスの化物にばっか出会うなー」
どうせならもう少し平和的な原作キャラに会いたかった。

そして、俺の部屋の前には段ボールが何個か置いてあった。
まあ、あの学校からの荷物だろう。
そういえば学校名みてなかったなー、と思いつつ、部屋に荷物を運ぶ。
そして、段ボールを一個開けてみると、制服やら教科書やらが詰め込まれていた。

千夜「生徒手帳とかになら書いてあるか？」
生徒手帳を段ボールから出して、中をみてみる。
そこに書かれていたのは

『下記の者は本校の生徒であることを証明する。

氏名　千夜煌貴
学校名　長点上機学園
学園長　浜瀬双磁』

な、長点上機…だと？
だが、思い返してみれば、長点上機だから、一方通行がいた。
まずそこで気がつくべきだった。

千夜「なんか、大変なところに入学しちゃったなぁ」

超電磁砲、現る。（後書き）

しまったァァァァァ！
ＳＳ２を読んでいなかった…ｏｒｚ
明日読んでくるので、ちょっと変更する点があるかもです。
そして超電磁砲、現るなのにすこし会話したくらいで終わってしまいました＾＾
原作キャラとの本格的な絡みは流石に原作編に入るまでないです。

千夜、生徒会へ入る。（前書き）

学園ものでは定番ですよね。
スペックを書くのは苦手なので、キャラに例えさせていただきます。
では、本編どうぞ。

千夜、生徒会へ入る。

俺が長点上機に通い始めて数日後、俺は学園長室に呼ばれた。

千夜「どうしたんだ？いきなり呼び出して」
学園長「実はな、君には生徒会に入って欲しいのだ」
生徒会か、面白そうだな。

学園長「理由としては生徒会長が家出した」
千夜「いやいやいや！家出する程ハードなのか！？」
俺は学園長に問い詰めてみる。

学園長「いや、ただ雑務をこなすだけで、後は好きにしてくれて構わない」
もしかしたら前会長はかなりマジメ君だったのかもしれない。
だが、それなら逃げ出したのにも納得がいく。

千夜「引き受けさせて貰おう。で、他のメンバーは？」
学園長「ああ、ありがとう。期間は今日から次の役員選抜までだ」
メンバーなら、生徒会室に揃っている。とのことだ。

そうして俺は生徒会室のまえに立っている。

（突入するか？否、まずは様子を見てから――
「あれ？千夜、こんな所で何してるの？」
む、空耳か？背後からアリサの声が…
「思いっきり心の声がおもてに出てるよ」

千夜「やっぱりアリサだったか」
アリサ「それよりも生徒会に何か用でもあるの？」
千夜「いや、お前には関係ないことだと思うが」
すると、アリサは
アリサ「ふふん。私はこれでも生徒会の副会長なのです！」
千夜「へー……ってえぇぇ！？」
さすがに俺は驚きが隠せなかった。

アリサ「それで、何か用？」
千夜「たいした用じゃない。俺が生徒会長になれって学園長に言われただけだ」
アリサ「それは凄いね――ってえぇぇ！？」
そしてアリサはそのまま生徒会室の中に駆け込んで行った。

千夜「ヤバいな、早めに撤退しなければ」
明日でもいいだろう。と自分に言い聞かせ、帰ろうとする、が
アリサ「ほら、こっちこっち！」
アリサが仲間を連れて登場してきた。

仲間は3人比率は女2人男1人だ。
まずはFF4のリディア（幼女）みたいなやつが話しかけてきた。
いるよね、ロリ体形なやつって。
「えっと、新しい会長さんですよね！？私は「はいはい、自己紹介なら明日聞くからね」

強引に会話を切って走りだす。
「あ、逃げないで～」
何か聞こえたが気にしたら負けだろう。

千夜、生徒会へ入る。（後書き）

今日も7時間昼寝をしてしまった。
そのおかげでデータが一回吹っ飛びましたw
最近データが吹っ飛ぶ→書き直し
で投稿しています。
では次回まで暫しの別れとなりますが、これからもガンメイカーを
よろしくお願いします。

生徒会メンバー自己紹介（前書き）

一応メンバーのスペックを考えていました。
次回からは原作ルートに入れると思います。
では、本編どうぞ

生徒会メンバー自己紹介

千夜「来た瞬間にコレかよ…」
おっす、オラ…じゃなくて俺ぁ千夜煌貴。

簡単にこれまでの事の説明をすると
学園長に呼び出される
←
生徒会長に任命される
←
アリサ＋他生徒会メンバーに追われる
←
なんとか逃げ延びる
←
翌日、生徒会室に入る
←
お☆と☆し☆あ☆な↑今ここ

これからどうするかを考えているが、中々いい打開策は見出せていない。
だが、これはチャンスでもある。
今、ここにいるのはあのリディアみたいなやつとアリサのみ。
他の二名が来たらヤバいが、今ならば戦力はこちらの方が上、だと思われる。
ならば早めに縄で縛るかして無効化しなければ…

「あ、会長さん何やってるんですか？」

お、男の方がきてくれた。
上手くやれば味方になるかもしれないな。

アリサ「あ、光代。やっと来たの？」
光代「今北産業」
千夜「部屋に入る
落とし穴に落ちる
オワタ」

光代「会長さんも大変なんですね…」
同情するなら助けてくれ。

光代「助け、ですか。ならこれを…」
光代君が置いていったものは…
（エアガンだとぉぉぉぉぉぉぉぉ！）

これは勝つる。
少しでも怯んでくれれば逃げやすくなるしな。

だが、この落とし穴…中に接着剤が仕込まれていたようで、抜け出せないようになっているんだ。
取り合えず後1人来る前にさっさと逃げ出―

「どうやら私が最後の1人のようですね」

絶望しかなかった。

アリサ「ほら、皆にちゃんと挨拶してね」
千夜「俺が、蒼天の奇術師、怪奇の瞳等の二つ名で呼ばれて「ないから」すいませんでした」

アリサが最近怖いです。
千夜「えー、では改めて。俺が千夜煌貴だ。よろしくな」

アリサ「じゃあ、続いて質問タイムに移りまーす」
もう、どうにでもなってくれ…
「あ、じゃあ質問」
アリサ「はい、じゃあ、美穂ちゃん！」

「千夜会長とアリサ先輩ってどんな関係ですか？」
『ノーコメントで』
おっと、不覚にも声を揃えてしまった。
でも、まさか死んだ先であいましたー、なんて話しても信じないだろうし、これが一番の選択だと思う。

美穂「前に千夜会長が先輩をおぶって帰るの見かけたのになぁ…」
あー、身体検査の時か。

アリサ「き、気を取り直して次の質問ある人ー」
「では、私が」
アリサ「じゃあ、杏奈ちゃんね」

杏奈「今回の会長は使えますか？」
つまりは精神が強いか、という事か？
千夜「ＰＣ関係なら任せてほしい。」
杏奈「わかりました。ありがとうございます。」

アリサ「光代は何かある？」
光代「いや、何も…」
アリサ「あ、そう」
酷い扱いだな、後でジュースでも買ってやろう。

アリサ「じゃあ、皆頑張っていってね！」
これが、原作開始の２０日前の出来事であった。

生徒会メンバー自己紹介（後書き）

〆がどうも思いつかないな…
どうも電改です。
一応身体程度は晒しておきます。
津和野光代　男　副会長　身長１７０ｃｍ体重５８ｋｇ
椎名美穂　女　書記　身長１４２ｃｍ体重３８ｋｇ
鶴野杏奈　女　会計　身長１５８ｃｍ体重４４ｋｇ
では、また次回～

いつもながら考えつかないサブタイ（前書き）

サブタイトルに意味はｒｙ

いつもながら考えつかないサブタイ

翌日

光代「やっぱりＨ＆ａｍｐ；Ｋいいですよね」
千夜「俺はライフルしかないな」

いきなりで悪いが、この話をしているのには訳がある。

昨日
アリサ「今日はこの辺で終わりね」
杏奈「皆さんお疲れ様でした」

長い一日が終わり、俺は家路につこうとした。
だが、帰れなかった。

千夜「光代にエアガン返してねえや」
光代はどうやらこの学校の裏山に行ったらしいので、俺も追いかけることにする。

少し歩くと光代を見つけた。
その手にもっているのは…『マルイＶＳＲ１０プロスナイパー』なる名前のエアガンだったか。

千夜（ちょっと驚かしてみるか）
忍び足で近づいていき、自分の得物『ベレッタＭ９２Ｆ』を構える。

千夜「チェックメイトだ」
光代「なっ！」

慌てて後ろを振り向くが、そこに居たのは敵ではなく…
千夜「よう」
銃を構えた自分の所属する生徒会の会長だった。
光代「会長…その銃いいですね」

いつもながら考えつかないサブタイ（後書き）

アリサが実銃を使うならばこちらはエアガンを使わせていただく！
電改です。
盆は宿題に追われると思うので、書ける内に書いておきます。
今回は一応前回の伏線回収回です。
では、また次回～

光代奪還作戦！（仮）（前書き）

寝る前に少しだけ更新

光代奪還作戦！（仮）

一方その頃

仲間Ａ「いやぁ、やはり強い人達とやると、自分の未熟さが分かるねぇ」

仲間Ｂ「そういえば光代は何処へ？」

仲間Ｃ「無線も通じないし…何かあったのでは？」

仲間Ｂ「よし、わかった。私が責任をもって探しにいこう」

仲間Ａ「そんな無茶な！あなたの学校がメンバーの中で一番門限に厳しいところなのに何故？」

仲間Ｂ「理由など、後で考えればいいさ。今は光代と早く再開したい。それだけだ」

仲間Ａ「ならば僭越ながら、私も連れていっていただけないでしょうか？」

仲間Ｂ「よし、では行こう。光代を探しに！」

仲間Ｃ「…早く寮に戻ろう」

光代「へぇ、こんな威力がでるんですね」
千夜「まあ、な」
俺の愛用している銃は結構改造を加えたために、かなりの威力がでるようになっている。

光代「あ、すいません会長。ちょっと無線が入ったんで、話してきていいですか？」
千夜「ん、ああ。そういえば仲間がいたんだったな」

光代「どうやらここの近くにいるみたいなので、ちょっと見てきますね」
千夜「おう、気をつけてな」
帰るか、と思った時だった。

？「動くな！」
千夜「…俺に下手な脅しはやめた方がいい」
？「ふん。とにかくさっさと光代をこちらに渡して貰えれば、いいんだが」
どうやら仲間は光代が俺に拐われた。と思っているらしい。

千夜「いや、そうしたい気持ちはやまやまなんだが…」
？「が、どうした」
千夜「光代なら、お前達を探しにいくって言って、何処かへ行っちまったぞ」

？「そんな事があるわけ…」
ない、とでも言おうとしたのだろうが、油断したのが間違いだ。
千夜（さっさと終わらせて、寮に帰らせてもらう…よっと！）
俺は能力を使い、一気に距離を詰め、袈裟蹴りを放つ。
そして、怯んだスキを狙い、回し蹴りを喰らわせる。

千夜「じゃ、俺は急いでるんで。」
そういえば、最近は寮に逃げ帰るってパターン多いような…

光代奪還作戦！（仮）（後書き）

一応、次で原作に入る予定です。
…あれ、デジャブ？

軽くプロローグ（前書き）

電改でございまーす。
…すみません。深夜のテンションでやりたくなったんです。
さて、ブログを見てくださってる方はわかると思いますが、千夜はあんな容姿なのですよ…。
…では、原作偏スタートです……

軽くプロローグ

やあ、皆。

千夜煌貴は不幸な少年である。

学園都市にてとある学校に転入した。
ここまではよかった。

そこからいきなり学園都市のＬＥＶＥＬ５、しかも序列第一位の『一方通行』と戦ったのだ。
だが、千夜煌貴…つまり俺はＳＩＲＥＮという世界で手に入れたこの世には無い武器「宇理炎」を使うことにより、見事、一方通行を撃退することに成功した。

それから何日かたったころ、学園長に呼び出され、生徒会長（仮）になってくれ、と言われた。
俺は渋々生徒会長という役職についた。

一般的に見れば「幸運だ」とか言われるだろうが、そうではない。
俺にとっては…ただ面倒なだけなのだ。

これは、そんな俺…千夜煌貴が地獄にて出会った少女「アリサ」と共に第三次世界大戦を生き残る、ただそれだけの物語である。。

軽くプロローグ（後書き）

もうネタがないや…

…取り合えず原作１２巻あたりでアリサが第三次世界大戦を生き抜くために必要なフラグを立てておきます……

……アリサの絵も希望があればｐｉｘｉｖに載せるよ。

……詳しくはブログの方をチェックなんだよ…

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！（前書き）

今回より原作1巻を始めていきます…
なんか千夜が単独行動ばかりしてますが、電改はキャラを同時に動かすのが苦手なので、そこは割り切って下さると、幸いです……
では、本編始まります…（今回はちゃんとしたサブタイトルになった気がする）

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！

～7月20日～

『某所にてとある少年が学園都市外部よりきた、自身を「インデックス」となのる少女と出会う』

つまりは、俺は介入できないわけである。
介入できるところとしては、魔術師【ステイル・マグヌス】と上条当麻の戦いくらいか。
援護するくらいはできるかもしれない。
幻想殺しで打ち消されなければ、ではあるが。

「さて、ここで問題がある」
そう、それは
「俺の実力だと簡単にステイルにも勝てるが、勝ってしまっていいのか？」
まあ、取り合えずは学校へ行ってから考えるとしよう。
夏休みであろうと生徒会に仕事はあるのだ。

作者「時間が無いので、キングクリムゾン！」

（キンクリにより、時間は夕方になりました）

「…よし、終了の時間だ。皆、解散！」

俺の声に反応して、皆、後片づけを始める。
さっさと片付けてしまわなければな…
今回の目的は［魔術師への接触］

つまりは、上条よりも早く学生寮へ行かなければならないのだ。

「ねえ、千夜」

アリサが唐突に話しかけてきた。
「あ、あのさ…今日、一緒に帰らない…？」
「あー、悪いアリサ。今日はちょっと…寄る所があってな」

悪いが、これは単独で動いた方が目的が達成しやすい。
そのために、誘いを断ることにする。

「そ、そう…なら、仕方無いか……」
アリサがかなり悲嘆しているが、これも目的のためなのだ。

そう、俺の主とする目的は…

原作に支障を出さずに原作に介入する。

やはりこんなファンタジーみたいな世界にこれたのだ。
楽しまねばいけないだろう。

「そういうわけで、俺は、先に帰るわ！」
「「「「お疲れ様ー」」」」
さて、上条の住む学生寮へ移動するまで、少し語るのを止めるとしよう…

ヒーロー（上条さん）は遅れて登場するものさ！（後書き）

キングクリムゾンは仕方無いのです……
主人公の主とする目的は最終的には変わりますよ？
しかもツイッター見てくださってる方はわかるかもしれませんが、
英雄王（金ピカ）、ＩＳ、この２つの単語が重要になってくるかもしれないですよ？
…かもですが。

魔術師　Ｄｉｆｆｅｒｅｎｔｉａｌ　ａｂｉｌｉｔｙ（前書き）

スティルさん１４歳

電改です。
今回はオリジナルな部分を含ませているので、多少矛盾があるかもしれません。↑どんどん指摘して下さいね。
更に！禁書目録のサブタイトル風に英語をつけてみました。（Ｇｏｏｇｌｅ翻訳でやったものですが…）

では、本編入ります。

魔術師　Differential　ability

入り口はオートロックらしいので、仕方無くビルから移動することにする。

今頃上条は［オヤツ］を食べているのだろう。
多分。

「うん？どうしてここに魔力を持った人間がいるんだい？」

この、特徴的な喋り方は…
「どうしたんだい？そんな驚いたような顔して」

「驚いた［ような］じゃなくて驚いた、んだよ」
「うん？僕としては１つ目の質問に答えて欲しいのだけど」

魔力を持っている。
そんなはずがない。
自分は一度も魔術なんてものは発動したことがな――
あった。

自分の持っている「宇理炎」。
これは魔術と関連があったはずだ。

それを発動したことはある。
それによって、眠っていた魔術回路が目覚めた、というところだろう。

「まあ、そんなことよりも…さ」

魔術師は言う。
「あの子を渡してくれないかな？」
あの子、とはインデックスのことだろう。
俺とは面識があるわけではないが、コイツに渡すのも何か癪なので
「渡さない、と言ったら？」
「うん、君を殺してでも連れて帰るよ」
まあ、こんなところでいいだろう。
そろそろ戦闘に入りそうだ。
無駄話はキリをつけて、戦いに集中する…
「なあ、お前は一体…何者だ？」
「ステイル＝マグヌスと名乗りたい所だけど、ここはＦｏｒｔｉｓ９３１と言っておこうかな」
Ｆｏｒｔｉｓ…日本語だと強者とか言う意味だった気がする。
「君はこの辺の説明なんてわかってそうだから、さっさと――死んで貰おうか」

魔術師　Ｄｉｆｆｅｒｅｎｔｉａｌ　ａｂｉｌｉｔｙ（後書き）

明日は大会…
コレを書いてるのは２：００…
大会には８：２０集合…

これ　は　し　ね　る

というわけで、本題へ。
千夜自体、魔力を持っていないわけではありません。微量ながらも持っている、という感じです。
本当に魔力量が凄いのは焔薙の方ですのでｗｗｗ
取り合えず3巻は強制介入しても何とかなるようにちょっとした話を入れないといけません…

アレイスターとの絡みって、難しいよねぇ？

対決～Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｔｒａｐ～（前書き）

電改なんだぜい
さすがに書いたんだぜい
今回は矛盾点多いかもしれないから、矛盾点あったら「Ｔｗｉｔｔｅｒに」報告をお願いします。

対決〜Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｔｒａｐ〜

「炎よ――」
ステイルが呟く。
瞬間、オレンジのラインが爆ぜた。
咄嗟にそれを能力でガードしようとするが、ここでふと、気がついた。
――そもそも超能力で魔術に勝てるのか？
その疑問が解ける間も無く、炎剣を構えたステイルが千夜を横殴りに叩きつけた。

「少しばかりやりすぎたかな？」
ステイルは炎を見つめて、自身の勝利を確信――否、それよりもこの事が他の者に気づかれていないかを気にしていた。

そんな中千夜は炎を掻き分け、日本刀を構えつつ、反撃の機会を伺っていた。
だが
「――ッ！」
ステイルが突如その場から飛び退いた。
「まったく――これを喰らって生きているなんて、どんな術式を使ったんだい？」
――知られていた！？
これでは潜伏していても意味が無いので、炎より出でる。
「――ふむ。その刀は凄い礼装だね…それならばこの炎であっても斬ることができる。そういうことではないのかい？」
実際は違う。だが、口裏を合わせておいた方が有利であるので、ここは斬ったということにしておく。
「…そうだ」

ステイルは微笑を浮かべる。
「…なら、一気にやらせてもらうとしようか！」
――『魔女狩りの王』か！
そうはさせない。
その前にやる。
ではそのために必要な力は？
簡単だ。
目の前の敵を一撃で葬り去る破壊力。
それがこの焔薙にはできる。
――いくぞ！
ォォォォ！という雄叫びと共にステイルへ突っ込む。
「おや、これを出すまでもなかったかな？」
千夜の行く手を阻むものがある。
それは――
「…『魔女狩りの王』か…」
「御名答…さすがに君でもこれは斬れないだろうしね」
――答えは…
「否だァァァァァァ！」
「ッ！」
ステイルはひどく驚いたようだ。
それもそうだろう。
自分の切り札が最もたやすく、そう、本体であるルーンのカードを切られたのだから。
「な――」
「…どうした魔術師」
ステイルは狼狽える。
「あ、あぁ――」
自分の最後を覚悟しているのだろう。
――そろそろ上条がやって来る頃だな
では、と思い、その場から去ろうとする。

瞬間、足から力が抜けた。

「何――」

だと？と言う前に千夜の意識は途切れた…

対決～Ｉｎｖｉｓｉｂｌｅ　ｔｒａｐ～（後書き）

ちょっとした解説
千夜が倒れたのは始めて魔術を行使するのに大規模魔術をいきなり発動したので魔力切れ～みたいな感じですね。

新訳２が欲しい今日この頃である。

人間性~Misunderstanding~（前書き）

どうも…電改突破というものです。
いい案がポンと出てきたので書いてみたいと思います…

人間性~Misunderstanding~

「は、はは…」
ステイルは苦笑する。
…たいした事は無い。ならば何故あそこまで追い詰められる？
妙に引っかかる事はあるが、取り合えずはインデックスの回収を済ませようと、歩き出した時であった。
「おい」
と、声が聞こえてきたのだ。
ステイルはこの時まで、彼の存在を忘れていた。
そう。彼とは――――

上条当馬である。

「な、なんの用だ！？」
ステイルの問いかけは簡単なものであった。
上条は即答する。
「決まってんだろ…アイツを…インデックスを瀕死にした挙句、無関係な奴まで気絶させるなんて…」
ステイルは焦った。
…そうか！コイツは奴が魔術を使えることを知らないから奴を”ただの学園都市に住む学生”と思っているわけか！

「何を言ってるんだい…彼女が傷ついたのは歩く教会が絶対防御であるという前提から起きた事故で――――」
上条はその言葉を受け、こう答えた
「だったら…神様は完全であるという前提から考えてみろ…世界が

無くなっても完全であるという前提から起きた事故と言えるのか？」

ステイルはその問いに答えられなかった。

「炎よ――」

ステイルがそう呟くと上条は吠えた。

「なんだよ…言うだけ言っておいて都合が悪くなると力に頼る…魔術師ってのはそういうモンなのか！あァ？」

…もはや切り札を出してでもコイツを仕留める……ッ！

そうした中で千夜は目を覚ました。

人間性~Misunderstanding~（後書き）

終わりが適当すぎる…
そしてお決まりのキャラ崩壊…
どんどんと先が見えなくなっていく…1巻すら無事に完結するかもわからなくなってきた…

必勝戦略…？~ He was clever？~（前書き）

――更新が遅れて申し訳ありません。電改です。
詳しい話は後書きにてさせて頂きます。それでは本文をどうぞ。

必勝戦略…？~ He was clever？~

千夜は、動かぬ身体を無理矢理動かし…立った。
霞みがかっていた視界が晴れていき、状況を把握するべく脳が活動を再開する。

「まだ動けたと言うのか…！」
ステイルが炎剣を構えようとしたところで上条の右手に打ち消される。
「な…ッ」
ステイルの炎剣を打ち消した上条はまだ立っていることが不思議な”一学生の”千夜にこう叫んだ。

「大丈夫か！？」

――誰かに…心配されている…？
千夜は眼前にいる学生を上条当麻だとは思えなかった。思考が働かないのだ。
「あ、あぁ…なんとか…」
言葉を紡ぐだけでも、気が狂いそうになる。
そんな状況で、ステイルは本来の目的”禁書目録の回収”を思い出し、彼女の元へ行こうとする。
だが、上条がそれを妨げる。

「…インデックスをどうする気だ？」
上条が言う。
「安心してくれ、少し預かるだけだよ」
ステイルが返す。
「理由はあるのか？」

上条が続けて問う。
「彼女は一年分の記憶しか持てない。彼女が１０万３０００冊を記憶している事は聞いているだろう？その１０万３０００冊が彼女の記憶領域を圧迫し過ぎているんだ。だから、僕達が記憶を消して、また生きられるようにする。それだけの事さ」
――つまり、俺と過ごした記憶も無くなるのか…
上条は少し考える。
――待てよ！前に何かで”人は１４０年分の記憶ができる”と聞いた事がある！

「…なぁ」
上条は、苦笑しながら尋ねる。
「なんだい…今更返せっていうのかい？うん？」
ステイルはインデックスを抱えて、少し面倒そうに言う。
「インデックスが記憶してる１０万３０００冊の魔道書…それは記憶のどのくらいを圧迫してるんだ？」
上条は、魔術師が何を言おうと、これからする事は決めている。

「うん？８５％だけど？」

――残りは１５％…だったら…！
「だったらよ…」
上条は、魔術師に、言い放つ。

「インデックスは…６歳か７歳で死ぬ事になっちまうぜ？」

必勝戦略…？~Ｈｅ　ｗａｓ　ｃｌｅｖｅｒ？~（後書き）

うわぁぁぁぁ！
話が滅茶苦茶になっていくぅぅぅぅ！
電改です。
よく考えたらこれ、神裂さん出番無しになるね（笑
ま、こうやってその場の気分で適当に書くから、更新が遅れるんだろうね☆
更新出来なかった事に理由はありません。単に遊んでいただけです。
誤字脱字、この説明間違ってるよ！等ありましたら、感想にでもどうぞ。

真実を伝える人～She is destined to be kept（前

ねーちんマジ出番無し。
電改です。
※注意　この話では、独自の解釈を含んでおります。これが…禁書目録かよおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！となるのが嫌な方は即座にブラウザを閉じて戴くか、この小説を読む事をお止めになると宜しいと思われます。
では、それでも良い方は本文をお楽しみ下さい。

ステイルは一瞬驚いた表情をみせる。
そして、ステイルは言う。
「じゃあ、彼女は…」
上条が応じる。
「そうだ。…完全記憶能力ってのは例えばその辺に生えてる木の本数とか…そんなゴミ記憶すら忘れる事はできねぇが、さっき言った通り、人間の脳の構造上、どれだけの記憶、どれだけの知識を覚えても『その記憶を墓まで持ってく』だけなんだ。つまり、インデックスの頭がパンクする事はありえねえ…『誰かが細工をして』無理矢理脳をパンクさせるような事をしない限りな」

ステイルは思う。
――彼女の脳に細工をして…一年置きに処理をしないと死ぬようにして…支配下に置くという寸法だったのか…
ふぅ。と一息ついた後、ステイルは、この男なら、彼女――インデックスを救う方法が分かるかもしれないと、期待をしつつ。

「なら、それを救う方法もあるんだよね？」

上条は答える。
「あぁ。医学的に、ならな。だけど、魔術とかいうのが関わってくるなら、お手上げだ」

千夜は、満身創痍の身体で状況を理解しようとした。
そして、気がついた。
――自動書記（ヨハネのペン）の事を知ってるのは…俺だけじゃないか…

ステイルは、やはりか…と呟くとこう告げる。
「…もう待っている暇はないんだ。救う手段が無いなら…教会に頼るしか――」
そこで、ステイルの言葉を遮り、千夜は言う。

「…待ちな…方法なら…ある…」

上条はバッ、と振り返り、千夜に駆け寄る。
「喋って大丈夫か！？」
千夜は答える。
「あぁ…それよりも、インデックスを縛っている魔術の正体…それを…俺は知っている…」
何！？とステイルが言うと同時に千夜は言葉を紡ぐ。

「その魔術の正体は…自動書記（ヨハネのペン）だ…！」

書き直すと展開が全然違ってくるネ☆
電改です。　（二回目）
今回も神裂ねーちん出番無し。
これはもう出ないでしょｗｗｗまあ、強い要望があれば出番検討してみます。
では、この辺でキーボードを打つ手を休ませていただきます。
今回執筆での使用ＢＧＭは東方紅魔郷より１，３～６ｂｏｓｓテーマとなっております。気になった方は調べてみるのもいいかもしれません。
誤字脱字、この説明間違ってるよ！等ありましたらお知らせ下さい。

主人公になるために~To be saved by a strong c

二度目書くと展開違うね。
電改と言う者です。
早速ですが、本文をどうぞ。

千夜は続ける。
「それのある場所は…人目に触れない場所…そして…直線距離なら最も脳に近い…」
それだけで上条は理解したらしく、インデックスの元へと駆ける。

「…まあ」
ステイルが呟く。

「教会が大事な書庫を守る防壁すら用意してないとは考え難いけどね」

千夜はその言葉で思い出した。
上条当麻に対して効果的な術式。
「竜王の殺息(ドラゴンブレス)…聖ジョージの領域…!!」
ステイルはギョッとした顔で千夜に問う。

「竜王の殺息(ドラゴンブレス)に聖ジョージの領域だって!?」
千夜はあぁ、と頷く。
ステイルが続けて問う。
「それが仕掛けられているのか!?」
千夜が返す。
「いや…結界への干渉者…上条当麻に効果的な術式として使用されるんだ…」
ステイルは軽く舌打ちし、上条の元へと急ぐ。
だが、遅かった。
ステイルが上条を引き離そうとする直前、上条の身体が仰け反った。
そして、動かないはずのインデックスが宙へ浮く。

「＿＿警告、第三章第二節。Ｉｎｄｅｘ＿Ｌｉｂｒｏｒｕｍ＿Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ…禁書目録の「首輪」第一から第三までの貫通を確認。再生準備失敗。「首輪」の自己再生は不可能、現状１０満足３０００冊の「書庫」の保護のため、干渉者の迎撃を優先します」

主人公になるために~To be saved by a strong c

ねーちんなんて居なかった。
４巻で初登場だ。土御門と一緒にな！
独り言が多かったですね。
今回執筆中に聞いたＢＧＭは原曲「ほおずきみたいに紅い魂」、「妖魔夜行」で、Ｇｅｔ ｔｈｅ ｓｔａｒ ｆｏｒ ｙｏｕです。
気になった方は調べてみるのもいいと思います。
誤字脱字、ここ間違ってるよ！等ありましたらお知らせ下さい。

閑話休題～Occasionally even break

やあ、皆の電改突破だよ！
千夜「今日はテンション高いな」
ハハハ！気のせいさ！
千夜「む、そうか…」
さて、重要な話があるんだが…
千夜「なら早く言えよ」
あ、はい。

この作品は原作介入型二次創作って事は知ってるよな？
千夜「じゃなかったら自動書記と闘うなんてパスだパス」
で、だ。
千夜「ああ、読めたぞ、アポリオンさんの「とある死神の娯楽遊戯」を読んでこんな感じにしたいな～って思ったんだろ？」
チッ作中じゃ鈍いくせになんでこんな時だけ鋭いんだよ
千夜「知るか。…一応岩見祥吾との絡みは案が纏まってるんだよな？」
ああ。風呂入りながら考えてたぜ。
千夜「で、どうした」
ん？ああ、2巻終了後から次の巻に入るまで暇だろ？
千夜「確かに出番無いな」
だから！そこで他作者様のオリキャラとの絡みを入れようと思ってるわけですよ！
千夜「ほうほう。一巻はそろそろ終わりだし、ネタも無いから二巻進めつつ考えるわけか」
そういうこと！
千夜「やればできるじゃん電解！」
漢字違う！電「改」だ！

千夜「あ、すまんすまん」

ということで、二巻終了後、試験的に【銃器製造×娯楽遊戯】をやってみたいと思います！

千夜「そういや銃器製造（ガンメイカー）ってタイトルなのにアリサが全然出てこんではこれからも我が［とある異聞と銃器製造］をよろしくお願いします！　作者、ちょっと表出ろ…」

え、あ、ちょ、アーッ！

決着。そして~The end begins（前書き）

今回、一巻終わりです。
あ、後今回は後書きのちょっとした話みたいなのは無しで、物語のエピローグ的なものにします。
では、本文をどうぞ。

決着。そして~The end begins

「…彼女に魔力の無い理由はこの術式を組んでいたから、か」
ステイルが言った。
直後
「書庫内の１０万三千冊により防壁に傷をつけた魔術の特定を開始
…該当無し。術式の構成を暴き、対干渉者用の特定魔術（ローカルウェポン）を組み上げます」
インデックスはまるで操り人形のように首を曲げて、
「干渉者個人に対する最も有効な魔術の組み込みに成功しました。
これより特定魔術【聖ジョージの聖域】を発動。干渉者を破壊します」

「…こりゃヤバいんじゃない？」
千夜がステイルに問いかける。
「…まあね。でも、これよりも凄いのがあるんだろう？」
まあな、と千夜は答える。
「竜王の殺息、それが出たら…援護頼む」
ステイルが死ぬ気か！？と言ってくるが、気にしない。

そんなやりとりがあった間に、上条は亀裂へと走っていた。
このあまりにも残酷な物語の、無限に続くつまらない結末を打ち消すために。
同時、亀裂が広がり、開いた。

「来る！」
千夜はその瞬間、日本刀へと手を延ばし、抜刀の体制のまま、突っ込む。

ゴッ！！！と亀裂の奥から光の柱が襲いかかって来た。
上条が慌てて右手で打ち消そうとするが、四方八方に散るだけで、光の柱そのものを完全に消し去ることはできない。
（こいつは…ッ！）
そう、上条の右手に『魔術が食い込んできている』のだ。
このままだと押し負ける！と思った瞬間、光の柱が両断された。
「1人で片付けようとするんじゃねえよ。魔術の事なら、魔術師に任せとけっての」
そういいつつ、千夜は抜刀状態の日本刀を鞘へ納刀しようとする。が、バキリ、と日本刀の刃が根元から折れたのだ。
そして、
「【聖ジョージの聖域】は干渉者に対して効果がみられません。他の術式に切り替え、引き続き【首輪】の保護のため干渉者の破壊を継続します」
ステイルは少し歯を食いしばって
「――Ｆｏｒｔｉｓ９３１」
そう呟いた後、勘違いするな、と言い、
「道を作る！その間にやれるな？」
上条の返答は待つまでもなく「ｙｅｓ」だ。
「魔女狩りの王（イノケンティウス）！」
炎の巨人が生み出される。
光の柱とぶつかるが、炎の巨人は何度でも再生する。
その間に千夜と上条はインデックスの近くまできていた。
上条は、歓喜に震えていた。

対して千夜は何か忘れてるような？と、不安があった。
その時、
「警告、第二十二章第一節。炎の魔術の術式の逆算に成功しました。曲解した十字教の教義（モチーフ）をルーンにより記述したものと判明。対十字教用の術式を組み込み中…第一式、第二式、第三式。命名、【神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバクタニ）】完全発動まで十二秒」
光の柱の色が真紅に染まる。
ステイルが叫ぶ。
「もう持ちそうにない！早くしてくれ！」
千夜は跳躍し、インデックスの死角から鞘で殴りつける。
そのままバランスを崩したインデックスに上条が右手を引きつつ走る。
（この物語（せかい）が神様（アンタ）の作った奇跡（システム）の通りに動いてるってんなら…）
そのまま右手を開き、まるで掌底を放つように、
（――まずは、その幻想をぶち殺す！）
そして、上条は右手を振り下ろした。
「終わったか…」
千夜は安堵するが、なんだか引っかかる。
（なんか…大事な事があったような…？）
「警、こく。最終…章。第、零…。【　首輪、】致命的な、破壊…再生、不可……消」
ブツン、とインデックスの口から全ての声が消えた。
同時、千夜は忘れていた事を思い出した。
光の羽

急いでその場から逃げようとする千夜だったが、
途中で、光の羽を呑み込んでしまった。
それは誰も気が付かない事であった。
千夜でさえも、だ。

「魔凛？」
「おう、どうしたクロウ？」
「実は焔薙が折れちゃってね」
「なんか話し方が気持ち悪いぞ、お前」
「うん。さっきから…なんか苦しくてね…」
「…兎に角、ちょっと待ってろ。直ぐ行く」
「ありがと…」

魔凛の着いた時には刃の無い日本刀のみしか、そこには無かった。
上条当麻が死んだように、この日、

『千夜煌貴』も死んだ。

決着。そして~The end begins（後書き）

「千夜が、いない？」
魔凜が突然訪れたと思えばいきなり千夜煌貴が消えたと言うのだ。
「ああ、こっちでも尽力してるんだが、中々見つからなくて――あ、どこ行く気だよ！」
大体見当はついた。
いや、なんだか運命を感じた、と言う方が正しいだろう。

そして、カエル顔の医者に会い、簡単に事情を話すと
「なるほど、君が…あ、いや、こっちの話だよ」
などと言っていた。大方千夜煌貴が要らぬ事を吹き込んだのだろう。
「にしても昨日は何かあったのかな？一晩に重症の患者が二人も入院するなんてね」
重症。その一言がアリサの心を突いた。

「まあ、会えばわかるよ」
そう言って病室の前に案内された。
入る前に軽く身嗜みを整える。
途中で恋人に会うような念のいれようだね、とカエル顔の医者に言われたが無視。
よし。
覚悟を決め、扉を開ける。
そこには
「誰…？」
見た事もない銀髪の女性がいた。
いや、知っている。
例え声が変わろうと、髪色が変わろうと知っている。
この人は、彼は

千夜煌貴であると。

「私…アリサよ…忘れちゃったの…？」

銀髪はうーん、と少し考え

「知ってるよ。君はアリサ。双月・L・アリサ。それ以外の誰でもない」

優しい、何もかもを包み込むかのような柔らかな笑みと共に頭を撫でられる。

「これのどこが…重症だって…」

いうの？と疑問をぶつけようとする瞬間、銀髪に抱きしめられる。

そこには男性らしからぬ膨らみがあった。

「ホルモンバランスが崩れるっていう症状は聞いた事あったけど思いっきり性別が反転するなんてのは聞いた事ないんだよね」

つまり、

「そう。私、千夜煌貴は、存在する。けれど、かつての千夜煌貴はいない」

急に、泣きたくなった。

声をあげて。

その間、銀髪…千夜は微笑みながらずっと頭を撫でてくれた。

アリサが泣き止み、帰った後、カエル顔の医者は問う。

「さて、さっきはあんな嘘言っちゃったけど…本当はまだ少し【元】は残ってるんだろう？」

「あ、バレた？」

「隠すのが下手だね」

「そうかもしれないな」

「これからどうするつもりだい？」

「なるようになりますよ」
カエル顔の医者はそうかい、と言うと最後にこう千夜に問うた。
「君は、その身体でもいいのかい？」
柔らかな微笑みと共に千夜は答える。
「この身体だから、できる事があるのではないでしょうか？」

千夜煌貴の日常~What she is doing?（前書き）

眠…

かなり…眠い中…書いたので……

文章…滅茶苦茶ですが…どうぞ。

千夜煌貴の日常~What she is doing?

本棚を見るとその人の性格がわかるらしい。
「ラノベしかない…」
と、そんなこんなで八月八日。なんかインデックスの事件に関わっちゃって、その後なんだかんだあって色々大変なのである。
夏休みの宿題(リーサルウェポン)を大方片付けてしまい、暇な千夜が本屋を訪れると
【夏の受験フェアは終了致しました】
などと張り紙がしてあり、中ではツンツン頭の少年が不幸だ…、とリアルで土下座…いや、綺麗なｏｒｚの姿勢でいた。なんか無視出来なくなって参考書を奢ってやると
「おお！ありがとう！誰か知らないけど！」
いや、最後のは思っても普通口に出さないでしょ…、と思いつつもインデックスに花火買ってやれる～、と喜ぶ少年が見れただけでも良しとしよう。
いや、ｏｒｚポーズからいきなり復活したのが面白かっただけだが。何も言わずに立ち去ろうとするが、止められる。
「あ～、まあ、参考書買って貰っちゃったし、何か代わりに奢るよ」と言ったまでは良かった。
そこから千夜がならアイス奢って、と言ったのがダメだった。

本屋を出て少し歩くと上条が少し待っててくれ、と行って何処かへ行ってしまった。
ここで千夜も何処かへ行けば良かったのだが、待っていたのが間違いだった。
上条が来た。
後ろにインデックスやら不良集団(スキルアウト)やら連れて。
そしてやはり言うことは
「だぁ～！不幸だー！」

もう呆れるを通り越して凄い巻き込まれ率である。
…ここで少し考察。
只今千夜煌貴は完全に女の子に見える＋不良集団（スキルアウト）は弱そうな奴とかカモる＝狙われる
「逃げよう。そうしよう」
上条には悪いが逃げさせて貰う。
脚に力を込め…能力でかかる力を増加させたりして…一気に駆け出す！

…はずだった。
忘れていた。
これも超能力であったことを。
「幻想殺し（イマジンブレイカー）の影響なの！？」
思わず声に出してしまった。
不良集団がこっち見てくる。
ガン身だ。しかも体を舐め回すように。
千夜は走る速度を少し落として上条に尋ねる。
「なんでこんなの連れてきた訳？」

上条の言い訳はこうだ。
参考書置くために帰宅→腹を空かせたインデックス登場！→仕方なくアイスでも食わせようと外へ→途中で蹴飛ばしたビンが火炎瓶で不良集団の皆様の中心で爆発→追いかけられる→逃げて今に至る。
もはや才能と言える。
仕方無いので走って撒く事にする。
幸い千夜も制服だったため、走りやすい。
一方あちらはブーツやら革靴（多分卸したて）やらで機動性など皆無だ。特に革靴は終わっている。

「で、現在バーガー店の中にいると」
インデックスは
【新発売！超巨大タワーバーガー！これを作った奴は馬鹿か！？直径１ｍ、高さ１５０ｃｍ！食べる奴の顔も見てみたい！試験価格のため３５０円にてご提供！】という張り紙にべったりくっついて離れなかったが、無理矢理引き離し、シェイクを注文する。
４つ分。
「え！？」
と言ったのは上条である。
そんな事よりも高さ１．５ｍのバーガーが食べたいインデックスに、どうでもいいから早くシェイクを飲みたい千夜。千夜なんて肩で息をしている。店内は冷房がきいてるはずなのに汗を尋常ではないほど垂らして。
「まあまあ、カミやん。ウチらの仲ｊ「とうま！そんな嗜好品よりもこのたわーばーがーっていうごはんが食べたいかも！」…あー、何やのこの面子」
それもそのはず。
幻想殺しの少年。禁書目録の少女。最後に領域支配の超能力者（レベル５）ときている。
さらにインデックスは腹減りゲージが振り切ったようで暴飲暴食モードへ以降真近である。
そんな面子の事は諦めて千夜は席を探す。
すると世間話をする学生の声が聞こえてくる。
「よーよー。この前安西がテストで読心術使ってたってホントーかＹＯ？」
「それは間違いないかと。チカラの使用も授業の一環なので不正には当たらないそうですわよ？」
「むむ。きたねーＮＹＡＡＡ！そんなら私もテスト中にチカラ使っちゃうＺＯ？」

「貴方の専門は発火でしょう…」
「職員室忍び込んで用紙全部燃やしちまえばいいと思うけどどーなのＹＯ？」
…これが学園都市流世間話だ。
怖い怖い、と席を探すが、見つからない。
諦めて店員に聞くと、相席にしてください、とのことだ。
そのテーブルには
巫女がいた。
…訂正、巫女さんがいた。
決して博麗の人ではない。
浅間でもない。
あ、東風谷でも無かった。
姫神秋沙、だったか。
能力は吸血殺し（ディープブラッド）。
村を一晩で壊滅させたんだっけ。
少しメタなことを考えていると不機嫌そうなインデックスに先に座られていた。
上条も観念したようで、席へ向かう。
「なあなあ、君、長点上機の子やろ？やっぱ開発トップクラス校はルックスもええ子がおるんやなぁ…てあれ？男子の制服？あぁ！男装せなあかん事情があるんやね！大丈夫！ボクはそんなん気にせんから！」
あーエセ関西弁ウザいわー。
しかも勝手に決めつけやがった。
これでも胸は隠してるんだけどね。
閑話休題。
上条が座る。青髪ピアスが座る。…千夜はどこに？
…まあ、立って飲むのも一興、かな？
と壁にもたれつつ、シェイクを飲む。

「――――く」
シェイクを半分くらい飲んだところで巫女…姫神は言葉を発した。
確か食い倒れた、と言うはずだ。
「――――食い倒れた」
予想的中。
取り敢えず今は眼前のシェイクに集中。
ようやくシェイクが体温で溶けていい感じに飲みやすくなってきた。
ここから温くなるまでに飲み干せるかが問題なのだ。
こうなると大抵の人はシェイクを飲みつつ談笑したりする。
だから温くなって変なシェイクになるのに…と思いつつ、シェイクを飲み干す。因みにバニラ味。

「自棄食い」
話進むの早いね。
「帰りの電車賃４００円」
１００円貸して？ってやつね。貸すつもりはないけど。
上条の財布には参考書代３６００円はあるが、それのいくらかを夕食などに使うため余裕はないだろう。
つまり結果は
「――――巫女さん（おまえ）も１００円調達して帰るように！作戦会議終了！」
さて。
帰るか、と思ったが。
「――――シスターさんだの男装少女だの巫女さんだの属性強すぎな知り合い増やしてるってどう言うことやねん！何？これはカミやんがハーレムフラグ立てて回っとるんですかセンセーッ！」
聞き流せない言葉だ。
《クロウ！できたぞ！命名「壊神刀　焔薙」だ！》
なんともタイミングのいい。
《早速試したいから送って貰える？》

《わかった！転送するぞ！》
目の前にあったのは。

ＮＡ〇ＵＴ〇に出てくる首斬り包丁だった。
《そいつは切るというところに焦点をあててみた。後一つなんでも切れるってのもあったが、そういうの好きそうじゃないからな。それは刀であるなら何にでもなれる。…制限はあるがな》
今はこれで充分だが、やっぱりデカくて扱いにくいので、日本刀にする。
これであの青髪ピアスを…
そう考えていた時、不意にこちらへ視線が向けられた。
「えっと…取り敢えず成り行きでここまで来たけど…誰ですか…？」
む、知らないのか。
知らないならば教えてやるとしよう。
「千夜煌貴。学園都市に7人居る超能力者の一人…」
そこにいた全員が唖然とする。
無理もない。
一般に公開されてる画像と似て似つかぬ姿だからだ。
「いや…偽名かもしれへんし…」
「長点上機に訳を話して顔写真撮り直して貰ったのがこれ」
ズイッ、と生徒手帳を出す。
「ほ、ホンマや…でもなんでこない違うくなったん？」
「…それは、色々あったから…」
と少し俯く。
青髪ピアスが携帯で写メ撮ろうとしたから焔薙で両断してやった。
いい気味だ。

皆帰ろうとした頃の事だった。
塾の先生とやらがおいでなすった。
面倒事に巻き込まれる前に寮へ帰る。

…逃げ帰るのも久しぶりだ。
…逃げ帰る前に暑いからコーヒー飲んで帰ろうと思ったのがいけなかった。
コンビニ行けば一方フラグ。自販機行けばビリビリフラグ。
今日の気分はビリビリフラグだった。
案の定居た。
「ちぇいさー！…ふぅ。最近出てきにくくなったのよね。４５。じゃなくて４６。くらいだな、こりゃ」
なんか計算始めてる。
面倒なので首斬り包丁にして背の部分で思い切りぶっ叩いた。ナナメ４６。に。
ドガァン！と機械から出ては行けない音と共に缶が出てくる。品名は…
【アップルコーヒー】
Ａ○○ｌｅ社、ついにコーヒー作ったか。
味はそんなに変じゃない事を期待しつつ帰ろうとする。
が、
「ん。アンタ、ちょっと待ちなさいよ」
さすがです。
ＲＰＧのボスと一緒だね。立ち去ろうとすると止められる。結局バトれってことだ。
「あー。やっぱり似てるな…」
何が？と言っても何も答えない。
不機嫌になるぞ。
「あ！あの時の第６位ね！」
何故バレたし。
早めにアップルコーヒーでも飲むか。
「にしてもよくそんな体格で大剣使えるわね…アンタ、もしかしてＧ級？」

ＨＲ９だからそうだね。
って違う違う。
なんか描写が主観になってきてるのも気にしない。
「っと、そんな事よりも…探し回ったわよ、まさか性転換手術受けてるとは思いもしなかったけど」
なんなんだ。
ハッキリと物事は伝えなさいって親に言われなかったのか。
これがゆとりの原因だよ。
「どうやらあの第一位倒したらしいじゃない？」
ああ、やっちゃったやつか。
「…そんなわけで闘って貰うわよ！」
戦闘狂ですか貴女は。
どこの真島の兄さんだよ。
てか電撃の槍やめい。
回避面倒だから。
「ヒョイヒョイ避けられる…これならどう！？」
砂鉄か。
磁場を乱せば解決することだね。
「な…ッ！」
砂鉄の剣が崩れ落ちる。
あー、これはレールガンくるね。
「だったらこいつよ！」
コインを取り出す。
んー。
「…一つ言っておいたげる」
御坂はなに？と言っていたが、その表情には焦りが見えた。
ここで揺さぶりをかける。
「それを外したらどうするの？」
御坂の顔が強張る。
やっぱり何も考えてない。

これなら楽勝すぎる。
レールガンの一発位食らっておいてやるかな。
力分散させればいける。
「ッ！外さなきゃいいのよ！」
コインいっこ。
レールガンが発射された。
メタルギアジークのに比べれば造作もない。
だがここはあえて
「む。…くぅ」
身体で受けてみる。
結構力の分散って頭使うのよ？
御坂なんてもう放心状態だ。
これからどうするか。

「ま、なるようになるよね」

御坂が近寄ってくる。
「ちょ、なんで避けなかったの！？」
アレって避けれるものかと先ず問いたい。
「…手加減しといたからいいけど。こ、今度は本気でう、ううう撃つからね！覚悟してなさいよ！」
なんて捨て台詞吐いて去って行った。
…アップルコーヒー。
味は中々であった。
しかも増量中だったから少し得な気分だ。
さあ帰ろう。我が家へ。

「あ、千夜。お帰りなさい」
…何故居るし。
「居ちゃいけない？」

まあ、性別的には…ま、普通の奴らからみれば私達なんて、ただの友達程度にしか見えないし、大丈夫。
「…じゃあ、ここに住んでもいい！？」
「それはいきなり話が飛びすぎだよ」
事情はわかった。
アリサの部屋だけ作られてないらしい。
何処で寝泊まりしてたと聞くと友達の家に寄生してたらしい。…まあ、私でも同じってことか。
ならば
「部屋分けをしないと…」
ここは２ＬＤＫ。
「一つ部屋が余ってるし、それを使って？」
「何故疑問系？」
いや、あの部屋いいんだけど、ベッドおけないんだよね。と思っていた。
「…仕方無い。寝る時は私の部屋来て。一緒に寝よう」
ここで確認しておくが、千夜は性転換してない。男の拳銃はあるわけだ。間違いがおきてもおかしくない。
「え？いやいや、ベッドじゃなくてソファーで寝るから！」
それでは駄目だ。
ソファーなんて寝心地が悪い。
「なら私がソファーで寝るからアリサは部屋の使ってよ」
アリサは渋々それなら…、と了承した。
なんか今日は眠い。
さっさと寝ることにしよう。
そして千夜は眠りについた。

千夜煌貴の日常~What she is doing?（後書き）

ということでリアルでも寝ます…
おやすみなさい。

御意見、御感想お待ちしております。

吸血殺しとロリコン神父~Destined to be caught（前書

最近更新ペース早いな。
電改です。
もう３３話です。
あ、生徒会メンバーは後々出てきますので覚えて置いて下さい。
では、本文をどうぞ。

目が覚めるとそこは自室だった。

「…そうだよね」

目が覚めたら異世界なんてあるわけがない。否、あってはならない。

まだ眠気はあるが取り敢えずは起きておく。

そして徐に冷蔵庫を開けてみるが

「…見事に何もないね」

これでは機能してないな、と思いつつ出掛ける用意をする。

…もうすぐ夕方。

原作ではそろそろ三沢塾に乗り込むと思われる。

「それまでにステイルには会っておかないとね」

†

夏の夕暮れ。

千夜煌貴は元々規則というものが嫌いだった。

自分の生き方すら制限するなんて人外のやる事だ、と言って。

そのため、５時には家に帰りましょうなどと言った取り決めは一切守る気がない。

そんな事を考えていると、どこからか声が聞こえてきた。

「Ｗｈｙ ｄｏｎ'ｔ ｙｏｕ ｋｅｅｐ ａ ｃａｔ！ Ｄｏ

ａｓ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｔｏｌｄ！」

…上手く聞き取れなかった。

厨二の時にＧｏｏｇｌｅ先生で和訳してみたら「なぜあなたは猫を保持しないでください！あなたが言われたとおりでください！」と言う変な回答が返ってきたのは無視だ。

さて、原作だとインデックスが裏路地入ったらステイル登場だった。そのため少しばかり隠れておく。

「うん、あの時の。ここで何してるんだい？」

隠れる前に見つかった。

不審に思われてもいけないから正直に答えておくか。

「上条当麻のその後の観察。彼の記憶喪失と私の肉体、精神変化は関係あるかもしらないしね」

千夜はまだ確信は持っていなかった。

だが、原作に介入していけば何かわかるのでは？と薄々思い始めていたのだ。

「それはご苦労様…だけど僕はその上条当麻に用があるのでね。…どいて貰おうか」

ステイルが炎剣を構える。

対する千夜も日本刀を構えようと腰に手を持っていく。

だが、日本刀は無い。

（この状況って明らかに死亡フラグだよ…どうしよう…）

出来れば超能力を使いたかったが、あの頭痛に襲われては三沢塾へ行くなど到底無理な話だ。
そこで千夜が取るべき行動は…

「この場は…逃げる！」

これが一番。
ステイルは上条に用があるわけで、別に千夜に用があるわけではな――回り込まれる。

「おっと、忘れるところだった。受け取れ」

そう言って投げてきたのは一枚のカード…否、手紙。
その手紙には何も書かれていなかった。

「どういうこと？」

ステイルに問う。

「何時か分かるさ。あ、それは無くさないでくれよ？貴重なんでね」

何時か？貴重？意味がわからないが、これは大切と言う事がわかった。
ふーん。と手紙を見ている間に上条の元へ近づくステイル。

「久しぶりだね、上条当麻」

始まった。いや、始まってしまった。
というか原作と絶対違う。

久しぶりだねとか言いつつ炎剣で上条に襲いかかったからだ。

「何する気だテメェ！」

台詞までちょっと違う。

これって確実に私が介入しちゃったからだよね…、と千夜が悩んでいるが、残酷な事に物語は進んでいく。

「うん？内緒話だけど」

ステイルは懐から封筒を取り出す。

「三沢塾って進学予備校の名前は知ってるよね？」

前提かよ、と上条はツッコミつつ考える。

自分の知識には無い。

「みさわ…？」

「一応、この国ではシェア一位を誇る進学予備校らしいけどね」

ー三沢塾説明中ー

「そこ。女の子が監禁されてるから。どうにか助け出すのが僕の役目なんだ」

ステイルはロリコンなのか。

インデックスを助けたいと言ったかと思えば今度は姫神である。

科学と宗教は相容れないという考えは短絡だ。

実際新訳ではグレムリンという科学と魔術の融合した組織が出てくる。

「三沢塾は乗っ取られたのさ。科学かぶれのインチキ宗教が正真正銘本物の魔術師――いや、チューリッヒ学派の錬金術師にね」
「アウレオルス＝イザード…」

ステイルはギョッとした。
まだいたのか！という方ではなく。

「何故その名前を知っている！？」
答えは千夜が転生者であるから。
だがそんな事は言えない。
ではどうするか。今ひとついい案が浮かばない。

「な、なあ…その、あるれおるすって奴が黒幕って事でいいのか？」
上条ナイスだ。
確かに黒幕だ。
というか黄金錬金って錬金術師の根源だった気がする。…改めて考えたらすごい奴だった。

「多分、そう考えていいだろうね…」
「なら、その目的は…」
簡単だ。
三沢塾に居る吸血殺し。
読んで字の如く対吸血鬼の最終兵器。
吸血鬼はその血に群がり、その血を吸った吸血鬼は灰になる。
これを要約して言えば

「吸血鬼を殺す。又は生け捕りにできる少女を手に入れること」
これ以外ない。

「吸血鬼？お前、それ本気で言ってるのか？」
確かに。
吸血鬼なんて存在するかもわからない。
だが、未知であるからこそ、不安になる。
居るのかわからない。
居ないのかもわからないからだ。

「まあ、端的に言って僕はこれから三沢塾に特攻をかけて、吸血殺しを連れ出さないとまずい状況にある」
うん、と二人は頷く。
まあ、関係ないだろうと千夜は考えていた。
現実はそう甘くない。

「簡単に頷かないで欲しいな。君達だって一緒にくるんだから」
君、達？
言葉を失った。
何故千夜まで行かなければならないのか。

「君の場合は側にいた子…アリサだっけ。あの子が死ぬらしいよ」
三沢塾の場所の暗記にとりかかる。
炎のルーンで完全消滅前に暗記はできた。
あの時１０００円札でも貸せばよかったと後悔するのは些か遅すぎたようだった。

吸血殺しとロリコン神父~Destined to be caught（後書

充電の減りが早いな…
これでも結構頑張った方。

行間はできるだけ開けてみた結果がこれだよ！
台詞の前に開けるっていうのが一番しっくりくるんですよね。

御意見、御感想、お待ちしております。

そして変態は全員となった~　Memories of the term A

ぐへへ。
深夜で大分テンション上がってきた電改です。
今回はこの二次創作で始めて上条当麻のラッキースケベ発動です。
え？犠牲者？突入メンバーを凝視してみましょう。
では、本文をどうぞ。

…千夜煌貴は三沢塾の前にいた。
黄金錬金面倒だな、と思いながら乗り込む面子…もとい戦力を確認する。

ステイル＝マグヌス
ルーン使い。切り札は魔女狩りの王（イノケンティウス）。

上条当麻
学園都市に住む学生。切り札は幻想殺し（イマジンブレイカー）。

最後に自分、千夜煌貴。
転生者。切り札は領域支配（アブソリュートフィールド）。

電改「さァて！ここから主観のターンだ！目ン玉引ン剥いてよォく見やがるンだな、読者様！」
一方口調で最後読者様って…
電改「煩ェ！」
主観始まります。

†

さて、ここで錬金術について説明でもしよう。
簡単に言うと、大体同じ物を違う物に変える。ということだ。
電改「学校で授業外に聞いたことあるが、元素で性質の似たものに変える、というのが錬金術の元らしい。これで鉛を金に変える事は『理論上』可能らしいぞ。ま、厨二の俺には関係ねぇがな！」

そういえば。
この中に入るとアウレオルスが壊れるまで出られないはずだ。
「さて、盾が二人もいる事だし、僕も安心して特攻ができるというものだ」
なんてやつだ。
人を盾と言いやがった。
…まあ、領域支配は殆ど盾の意味合いが強いのだが。
「どうするの。やっぱり正面突破？」
そうだろうねと回答を貰った。
先にアウレオルスダミーでも殺るか。
気晴らしにだけど。
ただ、瞬間錬金（リメン＝マグナ）は厄介だ。
…使う前に殺せば問題無いか。
「まさか正面突破で正々堂々挑むつもりか？勝算はあるのかよ」
一応私は領域支配があるから大丈夫。
それよりもステイルの方が心配だ。
炎剣だけで挑むとかひのきのつえだけで龍神王に挑むのと同じレベルだ。
あ、コマンドはたたかうオールで。
これはもうマゾだね。
ステイルは「ロリコンでマゾヒストな黒衣の神父」のレッテルを貼られた！

おふざけはこの辺にして。
もうステイル、上条と一緒に三沢塾の中へ入っていた。
お、授業やってる。

「さあ、声をあげて言うのです！
ツモ！１２０００オール！」

ちょっと待て。
何故麻雀を教える？
しかも１２０００オールって確か役満…
直撃だと３６０００とか痛い。

「なんだいこの授業風景は…」

流石に違和感を覚えたね変態神父。
実際１２０００オール！とか言うのは天牌の中だけでおｋです。

「つも…？１２０００おーる？」
「そう！ではこの手は！？」
「…４０００オール。これなら実践でも良く出る方だね」

おっと。答えてしまった。

「はい次！実際に打ってみましょう！」

へー実践か。
お、手動卓。
あ、先生が積み込みしてる。
他の生徒気付こうよ。

ん。これドラ爆の手だね。
あー見てられない。

「開くかな？」

扉に手を掛ける。
瞬間、強い力で地面に叩きつけられる。

「きゃ…ッ！」

危ない危ない。
受け身をしておいて正解だった。

「やはり君でもダメだったか」

でもとはなんだ。
というか試したなら先に言ってよ…
…あ、上条が同じ目にあってる。いい気味だ。

「なら階段で行くしか無いか」

ステイル…私は盾にしないでね？
上条ならいくらでもしていいからさ。

食堂だ。
ここで何かあった気がする。

「魔術師！」

上条が叫ぶ。

あったね、こんなイベント。
さて、ここで私も試してみたい事がある。
焔薙の生み出す魔力を使って何か魔術を使えないものか。

「マズイな…これだけの人数で詠唱するとなればかなり時間が短縮される！」

思案したが、神裂みたいに三次元的な魔方陣を描くのはどうだろうか。
剣を次々変えてその剣の描く軌道で…というものだ。
ただこれ絶対相手が一人じゃないと出来ないんだよね…
あの黒曜石と殆ど変わりないよ…
一人『だけ』は確実に仕留められる。

「出番だ最強の盾（イマジンブレイカー）」

よし、私は除外か。

「それに無敵の盾（アブソリュートフィールド）」

ちょ。
何期待してるのよアンタは。
領域支配は自分の身を守るので精一杯ですぅ！！！

「グレゴリオの聖歌隊め…」

塵も積もれば山となる。だっけ。
見くびってたよ…小説の記述じゃこんなもんか、とか思ってたけどリアルってこんなに怖いのね。

「何をやってるんだ二人とも！」

いやいや。

切り札出そうよ。

私の切り札（カード）じゃなくて貴方の切り札（カード）切ろうよ。

「く…そ！量が多すぎる！何か打開策は無いのか！？」

上条が叫んだ。

ステイル…まさかとは思うけど私まで落とさないよね？

「ある事にはあるけど…ここでこれを使う事になるとはね」

落としたら瞬間で道連れ決定だよ？

「お気の毒に、カカシ君♪」

あ、落とされなかった。

「君は僕に降りかかる火の粉を払って貰いたいからね」

訂正、ロリコンでマゾヒストな神父に自己中を追加。

「そのためだけに上条落としたの？」

ここで死ぬような奴にインデックスは任せられない、という事だろうけど。

「自然、【偽・聖歌隊】を使えば何処に潜んでいようが【核】へとおびき出せるとは思っていた」

アウレオルス＝コピー　来襲。
常に優雅に…ボコボコよ！

「当然、侵入者は３人のはずだが…貴様のガードは第六位だけか」

さて、日本刀を…これって分裂できるの？
《ん？おお、クロウか。一応できるぞ》
ん。ありがと。
なら話は早い。
日本刀を分裂させる。その後、腰に下げてる一本を除いて他全てを投擲ナイフに変える。
瀟洒なメイドか！って突っ込みは無視。第一私ＰＡＤ無くても結構あるし。…男として誇れないけど。

「君は今から戦いますと宣言をしているのか…？」

それはもう。
眼前のアウレオルスに八つ当たりするつもりだ。

「愕然、第六位がこれだけとは」

言ってくれたね。
投擲ナイフを投げる。
更にそのナイフの行先にナイフを当てる。
こうする事でナイフの軌道を変える。
さあ、仕込みは終わりだ！

「行くよ――ッ！」

日本刀を手に突っ込む。
さあ、これで終わりとなる。

「呆然、何の策も無しに突っ込んでくるとは」

リメン＝マグナ使用前に倒す！
日本刀を抜刀する。
その切っ先からは蒼白い炎が曲線を描く。

「唖然、魔術を行使しようとは」

ナイフの軌道を更に変更。
領域支配はオリジナルとの戦闘に備え、とっておく。
突っ込む。
リメン＝マグナを出そうとする瞬間、いや、半瞬前、

刀は日本刀から黒炎を纏った巨大な大剣へと変貌を遂げた。

大剣になったことでリーチが伸びる。
オウレオルスの身体を切り裂く。
更に黒炎はその切った所から徐々にアウレオルスを焼き尽くしてゆく。

「…容赦無いね」

いやいや、出会い頭に炎剣振り回す人に言われたく無いよ。
…というかアウレオルス＝コピー弱すぎる。
さっさとオリジナルも倒して帰ろう。
というか焼死って原作でも同じだった気がする。

「全て忘れろ」

そんな声だった気がする。
が、聞こえた途端、何があったかを全て忘れた。

「ん？何故僕はここにいるんだ…それに君も」

黒衣の神父がいた。
ここはどこだ？
それを考えようとしたが、瞬間、爆音が響いた。
原作二巻だと確かグレゴリオの聖歌隊の原典が開始された。
ここは三沢塾か。
原作通りにいったとなれば…

「記憶が、無くなった？」

至極当然の事だ。
さて、どうやって目覚めるか。
…領域支配使う？
でもそれをしたらオリジナル戦不利になるなぁ。

「仕方無い。これで叩くか」

ステイルを、である。
だが肝心のステイルがいない。
あ、解除してから3分間は猶予があるのか。
という事で結局領域支配の出番となった。

「祝☆よくも人様を囮に使いやがったな記念ッ！」

綺麗なアッパーカット。
さて、上条に殴って貰うとしよう。
「ねぇ、私も殴ってくれない？」
ただのＭ（変態）です。本当にｒｙ
「あー、っと…触るだけでいいんじゃないかな？」
ナイスだよ上条！
さすが、我らが主人公上条当麻♪
「さあ、触って触って」
ただの変態です本当にｒｙ
「よし…っとその前に、その服、魔術使ってないよな？」
無論。
先ず長点上機の制服に普通は魔術をかけようなんてしない。
「大丈夫。さ、触って触って」
変態がここにいます。おーまわーりさーん。あ、私神だった。
「よ、よし…」
上条が近づいてくる。
床にはステイル。

そのステイルは

「――きなり何をするんだ上条当麻！」

上に飛んだ。床から上に。ステイルの上を跨ごうとしていた上条の股間に頭突きをＨＩＴさせる。

アッパーカットとだったらこっちの方が痛いだろう。

「――ッッ～～！！」

声にならない痛み。

さらにステイルが立とうとするから上条がこっちに倒れこんでくる。

そして

むにゅ…っと私の胸を掴んだ。

ヒャッハー！
やっぱ戦いの後の一発は格別じゃわい！　ｂｙあるモン○ンの同人○より。
てことで餌食一人目は我らがヒロイン千夜煌貴となったのだ。
千夜「殺されるか派手に殺されるか選ばせてあげる」
あ、すみません。
でもこれだけは言わせて欲しい！
千夜「なによ」
千夜煌貴ハァハァ
千夜「死ね。で転生してすぐ死ね。また転生してすぐ死ね」
ゴールド・Ｅ・レクイエムかよ…
というかキャラ崩壊！
千夜「別に本文と関係無いしいいじゃない」
そういうギャップ萌え～
千夜「よし、望み通り燃やしてあげる」
ちょ、ばか、やめ、アーッ！

御意見、御感想お待ちしております。
ついでにこの小芝居の感想もいただけると嬉しいです。
千夜「どのくらい？」
【真・聖歌隊】に特攻できるくらい。

三十分くらいで仕上げてみた。
電改です。
いよいよ次回はコラボですねー。
どうなるでしょうか？
では、本文をどうぞ。

電改「い、今入力した事をありのままに話すぜ。
深夜のテンションで暴走して上条ラッキーが千夜に発動した。俺は領域支配や銃器製造なんて厨二をしてはいるが、あれはそんなモンじゃねぇ。もっと恐ろしい「運命」の片鱗を垣間見た気がするぜ…」

「…」

場が固まる。
勿論上条の手はそのままの位置だ。

「え、あ、ご、ごめん…」

と上条が手を引く。
体ごと引いたので神父の黒衣の裾に引っかかって転んだが。

千夜は思考が止まっていた。
何が起こったかを判断しようともしない。
…この場合は判断しない方がいいが。
だが、思考が止まったという事は状況を理解しての行動であるため実際は

（うわぁー！！む、むむむ胸触られたぁー！？）

かなり動揺していた。
上条ラッキー恐るべし。
これならあの最強の一夏にも勝てるかもしれない。

「…何をしているんだ君達は」

原因を作った奴が何を言うのだ。
ステイルが起き上がらなければ別にこのような事態は無かった。
だが全ての元凶は何も無かったかのように先を急ごうとしている。

「あ、あぁ…い、行こうぜ…」

上条もかなり動揺していた。
何故出会って一日も経っていない女の子の胸を触るなどという事をしたのか。
…全ての元凶はステイル＝マグヌスに他ならないが。

「え？あ、うん」

焦りを隠せぬまま最上階へと上がる。
このままでアウレオルスに勝てるのだろうか。

現在の状況
ステイル
何が起こったのかよくわからない。切り札はほぼ無し。

上条
女の子の胸を触ってしまった事に若干の嬉しさを覚えている。切り札は幻想殺し。

千夜
胸を触られてかなり動揺している。切り札は現在使用不可能。

結論、勝てない。

いや、精神崩壊はできるだろうが難しい。

「着いたようだね」

最上階の扉は開いていた。
まるで入って来いと言わんばかりの殺気。
とても歓迎されてはいないようだ。

「さて、まだ居るという事は君が本体でいいのか？」

ステイルが口を開く。
部屋の中には入ってきた三人とずっと居た一人。

「あれがアウレオルス＝イザードの本体ね…」

まだ少し狼狽えてはいるが、余裕はでてきた。
千夜は隠しておいた投擲ナイフを構える。

「なんかよくわかんねぇがアイツをぶん殴れば全部解決するってことだな」

右手の調子を確認する。
…まだあの柔らかい感触は残っている。
だがその余韻に浸る暇も無い。
上条は右手を握り締め、アウレオルスを睨む。

「ふむ。君達も禁書目録に執着するか」

何の話をしているのか。
もはやコイツは千夜達が武器を構えた事により、かなりの動揺をし

ている。

「一気に畳み掛けさせて貰う」

そう言って千夜はナイフを投げる。
領域支配を使う。
目標はナイフ。
制御下に置き、軌道を物理法則を完全無視したものにする。

ヒュンヒュンと、ナイフが弧を描く。
そこから、アウレオルス＝コピーを死にいたらしめた大剣を取り出す。

「さて、上条。自分の身くらいはその右手で守れよ」

千夜は一気に距離を詰める。
アウレオルスは一瞬、反応が遅れ、黄金錬金を出すタイミングが遅れる。
その間にアウレオルスの横へと行き、大剣を日本刀へ変える。

「さて、ここから少しでも動けばお前は死ぬ」

それだけでアウレオルスを完全に追い詰めるには充分だった。
アウレオルスは、まるで糸が切れ、壊れた人形の様になって「待っておくれ…」などと繰り返している。

「こんなので良かったのか？」

上条が尋ねる。
道中はどうにせよ、アウレオルスを追い詰め、精神を崩壊させると

いう事に成功したのだ。良しとしよう。

「…コイツ（アウレオルス）どうするの？」

ステイルは少し考える。

「…他の奴らが後始末はしてくれるさ。心配しなくてもいい」

…さて、これで無事に帰れる。

と、誰もが考えるだろう。

だがそこには、残酷な物語（リアル）が待っていた。

サブタイトルからコラボを思わせてるな。
千夜「別にそのくらいいいのでは…？」
いがみっつ見えるー
千夜「話　を　そ　ら　す　な」
…
千夜「まったくこの作者は…」
さて！遂に次回！アポリオン様の「とある死神の娯楽遊戯」より主人公の岩見祥吾に登場して貰うのだが。
千夜「だが？どういう…」
ネタが無い（ドヤァ
千夜「ドヤ顔決めたよこの作者！」
一応次回に繋げやすくしたんだけどね。
千夜「まあ、「ネタなんてその場の気分で考えてる電改に死角は無かった！」とか言って適当にやるのだろうけど」
あ、バレました？
千夜「もう読者の１割は知ってるかと」
結構居るな…
千夜「…話が長くなってしまいました。それでは次回」
とある死神と作品融合（コラボレーション）お楽しみに！
千夜「またベタな感じのタイトルね」
だ…だって寝てないから頭が働かないんだもんっ。
千夜「だもんっ。だっておｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」
笑いやがったな！
千夜「取り敢えず作者、寝ましょう。私も眠くなってきたし…」
そうだな。
千夜「今回だけ特別に添い寝してあげますから…」
もう喜んで寝かせていただきます。

御意見、御感想お待ちしております。
千夜「この小話の感想もくれると嬉しいかも…」
嬉しすぎて黄金錬金受け止めれるレベルなのだｚｅ☆

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1999u/

とある異聞と銃器製造(ガンメイカー)

2011年12月29日10時46分発行